主は、生きておられる

Unser HERR lebt



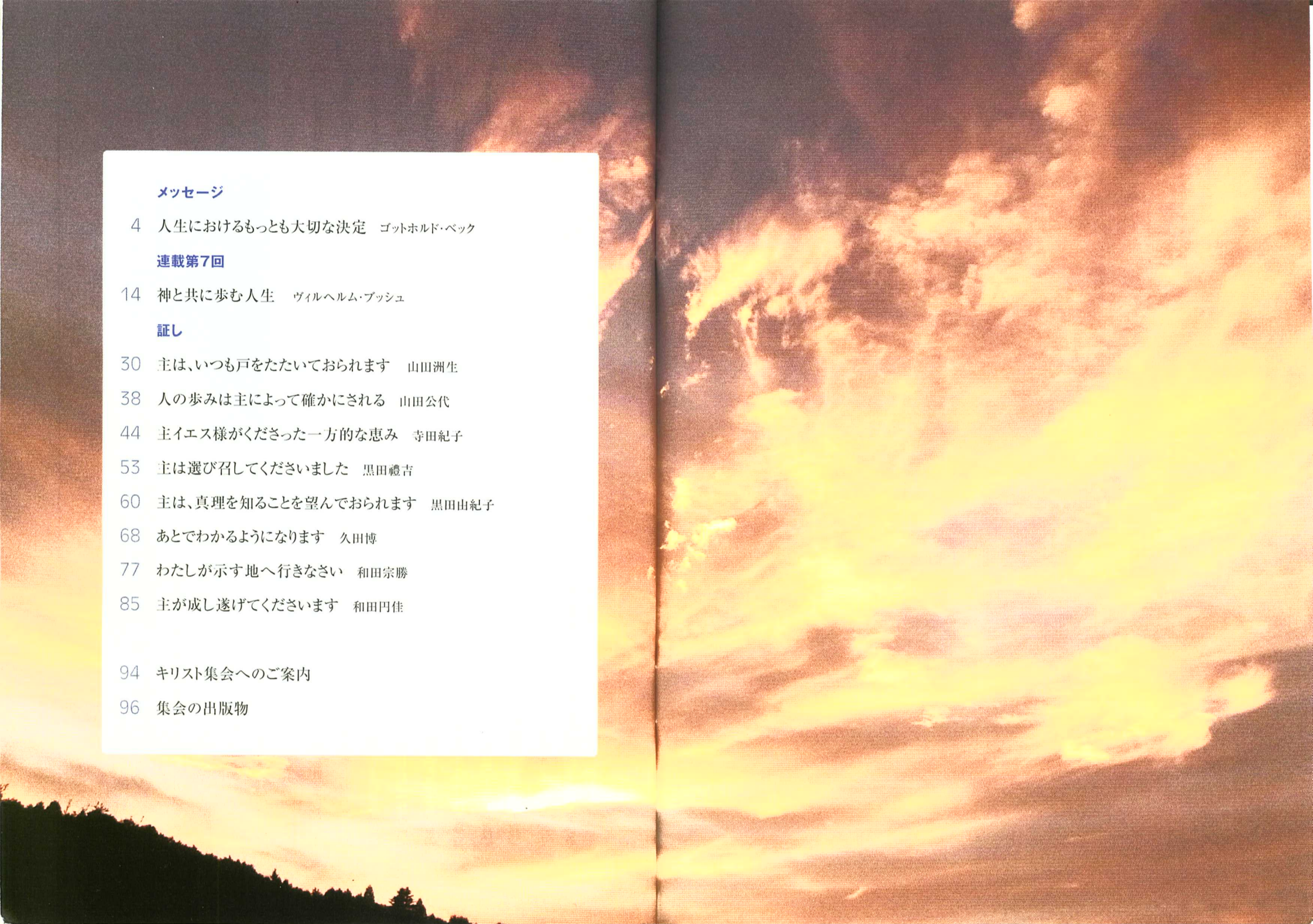
2012 graph magazine vol. 26

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 26



メッセージ

4 人生におけるもっとも大切な決定 ゴットホルド・ベック

連載第7回

14 神と共に歩む人生 ヴィルヘルム・ブッシュ

証し

30 主は、いつも戸をたたいておられます 山田洲生

38 人の歩みは主によって確かにされる 山田公代

44 主イエス様がくださった一方的な恵み 寺田紀子

53 主は選び召してくださいました 黒田禮吉

60 主は、真理を知ることを望んでおられます 黒田由紀子

68 あとでわかるようになります 久田博

77 わたしが示す地へ行きなさい 和田宗勝

85 主が成し遂げてくださいます 和田円佳

94 キリスト集会へのご案内

96 集会の出版物

人生におけるもっとも大切な決定

ゴットホルド・ベック

あなたがたは、光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めのころを、思い起こしなさい。

（ヘブル　10・32）

モーセは民に言った。「奴隷の家であるエジプトから出て来たこの日を覚えていなさい。主が力強い御手で、あなたがたをそこから連れ出されたからである。」（出エジプト　13・3）

神の光に照らされると、その人は新しく造り変えられます。

その途中、正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があって、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。」私が「主よ。あなたはどなたですか。」と言いますと、主がこう言われました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」（使徒　26・13～15）

これは、パウロが天からの光に照らされたときの証しです。それまでパウロは主イエス様を信じる人々を激しく迫害してきました。パウロにとってイエスは十字架につけられ、死んでいるはずのものであり、その信奉者たちは捕縛され懲らしめられなければなりませんでした。しかし、ある日突然、光に照らされて、思ってもみなかったイエス様の声を聞いたのです。その瞬間からパウロはイエス様に捕らえられ、離れられない者となりました。また、天からの光に照らされ、自分自身の真の姿、本当の心の状態を見せられたときに、主イエス様の絶対的な価値と偉大さをも見たのです。その結果パウロはどうなったでしょうか。次のみことばが証しています。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。（ガラテヤ　1・12）

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。

私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。（ピリピ　3・8～9）

天からの光に照らされ主イエス様によって捕らえられたパウロは、復活されたイエス様から素晴らしい希望と使命を与えられました。

わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。（使徒　26・17～18）

人生におけるもっとも大切な決定

パウロをユダヤ人以外のための伝道者と変えられた神は、光であられます。

神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。（1ヨハネ　1・5）

主なる神はご自身を「光の父」と呼んでおられます。神は近づきがたい光の中に住んでおられます。ところが悪魔によって引き起こされた罪の結果、この世は荒廃し闇が支配するところとなりました。神は身をひかれ、地は闇となったのです。しかし、神のことばによって光ができました。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。（ガラテヤ　1・12）

まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。（詩篇　33・9）

まったく光のない世界がどのようなものか、私たちには考えることができませんが、喜びのない世界であることは確かです。光はいのちであり、闇は死です。光は神から出るいのちの力です。聖書は「**神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた**」（創世記　1・3）と言っています。何とたやすいこと、何という神の御業でしょう。

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。（2コリント　4・6）

ところで皆さんは、すでにこの光を経験しておられるでしょうか。主である神が皆さまの人生に、また心の暗闇にすでに語りかけられたでしょうか。「光よ。あれ！」と神が語られることはできません。「選ぶこと」が必要です。主イエス様の光か、あるいは自分の闇か。つまり、主イエス様を光として受け入れるか拒むかのどちらかです。「神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた」という経験をする人は本当に幸いです。

次に、光に照らされることが何を意味するか見てみましょう。

1光に照らされることは、新しく生まれ変わることです

パリサイ人でユダヤ人の指導者として著名だったニコデモに、イエス様は次のように言われました。「**まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません**」（ヨハネ　3・5）

宗教をもつことが大切なのではありません。神の光に照らされることが、もっとも大切なのです。ニコデモは主イエス様に

ときに、人間の生活にも回復の奇跡が行われます。それは十字架の道です。もし、聖霊が私たちの心の奥底を照らすならば、そのとき、私たちの心の目は開け、罪人であることを悟り、主イエス様なしには永遠に滅びてしまうことを知ります。

例えば、いくら顔がきたなく汚れていても、暗い夜には見ることができませんが、灯りがつくと、そのきたなさに驚いてしまいます。同じように、上からの神の示しによって光に照らされない限り、だれも自分の心のきたなさを認めることはできません。

でも、私たちの不幸な暗い心のうちに主の御声がかかるとき、私たちは新しく造り変えられるのです。

もし主である神が、今日私たちの暗い心に「光よ。あれ」と言われれば、私たちの心に光が射し込みます。主イエス様は次のように約束しておられます。「**わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです**」（ヨハネ　8・12）と。皆さんはもうすでに、いのちの光をお持ちでしょうか。主イエス様に従わなければ、その光を持

人生におけるもっとも大切な決定

さえ「あなたはイスラエルの教師である」と言われるほど律法に精通した人物でした。他のパリサイ人と同じように毎日祈るために宮に上りました。また確かに週に二度断食しており、全収入の十分の一を捧げていました。しかし、彼は神の国を見ることができなかったのです。どうしてでしょうか。なぜならば彼はまだ神の光に照らされていなかったからです。ニコデモは、イエス様を「先生」と呼んではいましたが、光に照らされた後に初めて、主イエス様を「キリスト」と信じるようになったのです。人々の間にイエス様のことで分裂が起こった時、彼は言いました。

彼らのうちのひとりで、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。「私たちの律法では、まずその人から直接聞き、その人が何をしているのか知ったうえでなければ、判決を下さないのではないか。」

（ヨハネ　7・50〜51）

あることを知っています。主イエス様のなされた救いはただで、代価なしに受け取ることができるのです。もし、あなたが主イエス様のところにありのままの姿で出て行くなら、そして自分自身を、イエス様が十字架で完成された働きにまかせるなら、主イエス様に心から頼るなら、その瞬間にあなたは救われます。光に照らされることは、主イエス様を受け入れることを意味します。

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

（ヨハネ　1・12）

「教え」ではなく、イエス様そのものを、一つのご人格を受け入れることが大切です。どうか、福音を信じ、心の扉を開いて主イエス様を迎え入れてください。イエス様は今、あなたの心の外で待っておられます。あなたの内に入りたいと心から願っておられます。

人生におけるもっとも大切な決定

また、十字架上から降ろされたイエス様の葬りのためにもやって来ました。

前に、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬とアロエを混ぜ合わせたものをおよそ三十キログラムばかり持って、やって来た。

（ヨハネ　19・39）

2 光に照らされることは、救いを経験することです

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

（エペソ　2・8）

多くの人は、善い行いによって救われると信じています。自分の働きによって「救い」を自分のものにしたいと思っています。しかし、神の光に照らされた人は、救いが完全に「ただ」で

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（黙示録　3・20）

あなたは主イエス様が心の扉を叩く音を聞いても、扉を閉めたままでいるのでしょうか。主イエス様は決して強制なさいません。扉を開ける鍵はただ内側にだけ、つまり人間の側にあるということを忘れないでください。あなたが扉を開けなければ開きません。心の扉を開いた瞬間に、主イエス様は入って来られます。「わたしは入りたい」と主イエス様はおっしゃっています。主イエス様を心に迎え入れませんか。

この恵みの提供を受け取らないなら、いつか後悔することでしょう。遅くならないうちに光の方を選んでください。

3光に照らされることは、主に立ち返ることです

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、（1テサロニケ　1・9）

光に照らされた人は、生きた真の神を礼拝することだけが本当の礼拝であり、他はすべて偶像礼拝であると知っています。

私たちはいったいどのようにして、主イエス様を知ったのでしょうか。何となく分かったのでしょうか、それとも勉強して理解できたのでしょうか。パウロは告白しています。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。・・・異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき・・・（ガラテヤ　1・12、16）

主である神が、御子イエス様を私たちの内に啓示してくださること、それが重要です。そして主だけを礼拝すること、これこそが私たちの生活の根本であるべきです。使徒パウロのなした奇跡を見て、彼を神々の一人として崇めようとした群衆に対して使徒たちは叫びました。

皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。（使徒　14・15）

4光に照らされることは、悔い改めることです

あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。・・・ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。（ルカ　15・7、10）

悔い改めとは、罪を認めて告白し、罪を憎み、罪を捨てて、変わることです。自分の罪を認めることができるのは、神から与えられる大きな贈り物です。誠実に告白し、その罪人が自分の罪を憎んで罪を捨て、そして変わるときに、主である神の目的が達成されたことになります。

悔い改めるとは、自分が歩んでいる道を完全に方向転換することです。

光に照らされた人は、もう罪を犯したくないと思うようになります。もちろん日々、罪の誘惑と力を感じますし、自分の弱さも知っています。しかし光に照らされた人は、自分の力で自分を救うことは絶対にできないと知り、自分を救おうとする努力が無駄であることを教えられています。

5光に照らされることは、赦しが提供されることです

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。（エペソ　1・7）

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。（ローマ　3・24）

私たちは主イエス様の贖い、イエス様の流された十字架の血によってのみ義とされます。私たち自身の善い行いや働きによる人生におけるもっとも大切な決定

よっては義とされません。私たちの義とされる根拠はただ一つです。主イエス様のしみのない義、汚れのない正しさ、私たちが当然受けるべき刑罰を、主イエス様が身代わりとなって受けてくださったことにこそ、人間が義とされるただ一つの根拠があるのです。

ですから私たちは避けることのできない一つの選択を迫られています。あなたは自分の罪と、十字架にかかった主イエス様とのどちらを欲しますか。あなたはすでに罪過の赦しを受けたと言えますか。「**幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。**」(詩篇　32・1)とダビデは証しています。

あなたが自分はまだ救われていないと思っているとしたら、あなたがまだ大丈夫だと思って、それを先に延ばしているとしたら、神のことばを聞きましょう。

確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。
(2コリント　6・2)

6光に照らされることは、決定せざるを得ないときの到来です

狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。
(マタイ　7・13〜14)

主イエス様は比喩(ひゆ)によって私たちに「救いの道」を教えておられます。つまり、この世には二つの門があるが、一つの門は広く、もう一つの門の道は狭い。また、この世には二つの道があるが、一つの道は広く、もう一つの道は狭い。あるいは、この世には二つの群れがあるが、一つの群れには大勢の人々がおり、もう一つの群れには少しの人々しかいない。また、この世には二つの目的地があり、一つは永遠の滅びであり、一つは永遠のいのちである。このように、主イエス様は全世界の人々のたどる道を二つに分けておられます。どちらの道を選ぶかは、あなたご自身が決めなければなりません。主イエス様は私たちの心の深みまでご存じです。主がご覧になるのと同じ目で、自分自身を見ることができるなら幸いです。私たちの心の目が開かれて自らを省みるとき、主の御前に自分は恐るべき罪人であることがわかるはずです。自分が罪人であることを教えられると、罪の告白をせずにはいられない気持ちにされるでしょう。救いか滅びか、二つのうちどちらか一つを選ぶときが来ています。

7光に照らされた人は、主イエス様の御許で信じる者とされます

主イエス様をよりよく知るためには、主イエス様の御許(みもと)に来ること、そして主イエス様に親しく話すことが必要です。主イエス様は必ず「子よ、しっかりしなさい！あなたの罪は赦されたのだ！」と、おっしゃってくださいます。

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。
(ヨハネ　6・37)

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。
(マタイ　11・28〜30)

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
(ヨハネ　3・16)

信仰とは、望みをもって、イエス様の十字架の贖いを土台として揺るぐことなく、恵みの神を信頼することです。信仰とは、差し出されている主イエス様の御手をしっかりとつかむことです。

人生におけるもっとも大切な決定

神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ（8回連載、第7回）

第七章　信仰は個人的な問題か

よく、「信仰は個人的な問題だ」と言われます。イエス様を信じる信仰を持つことは「個人的な問題」でしょうか。これに対する答えは「はい」と「いいえ」の両面があります。キリスト者として生きる信仰には必ず「個人的な信仰」と「公的な信仰」の二つの側面があり、そのどちらか一つが欠けても十分ではありません。この章では「聖霊が正しく働いているキリスト者だけが持つ信仰の二つの側面」について明らかにしたいと思います。

信仰の個人的な側面

この問題を明らかにするために一つの話をさせてください。私はよく個人的な話をすると言われますが、それは教会で私の話を聞いている人が眠くならないように興味を持続できれば、と願っているからです。そのためには理屈だけではだめで、私が実際に体験したことをお伝えするのがいいようです。

その昔、ラーヴェンスベルガー地方にフォルケニングという有名な宣教師がいました。彼の宣教によってこの地方は大きく変わりました。ある夜、フォルケニング宣教師は、一人の裕福な農夫に

呼び出されました。彼は広大な畑地を持つ実直で勤勉な農夫でしたが、宣教活動を嫌い、自分が罪人であることを一切認めようとせず、十字架にかかられた救い主など自分と全く関係ない、と思い込んでいる人でした。「私は何も悪いことをしていない。私は誰も恐れない」というのが彼の口癖でした。フォルケニングが呼び出された夜、この農夫は死にかかっていて、一般の習慣通りに聖餐式に預かりたいと願っていました。大柄なフォルケニングは目を輝かせて彼のベッドに近づきました。長い沈黙の後、彼は次のように言って立ち去ったのです。「私はあなたのことが心配です。このままではあなたは天国には行けず、地獄にまっしぐらですよ」

金持ちの農夫は怒りました。「それが牧師の言うことか。それがキリストの愛なのか！」。ところが夜が更けると、この重態の農夫に、「俺はこのままでは天国に行けない。地獄しかないのだ。それが真実ならどうしよう」という自己の心の声が聞こえてきたのです。自分が犯してきたあらゆる罪が思い出されました。彼は神を敬っていませんでした。時には人を騙しました。このようなことが次々と思い出され、夜通し不安と恐怖の念に苛まれました。心は騒ぐばかりでした。彼の人生には沢山の負い目があり、自分が神の子どもではない、ということがわかりました。彼は真剣に神に立ち返りたいと願いました。

三日が経ち、彼は再び妻に宣教師のフォルケニングを呼びに行かせました。夜中でしたが彼はすぐ来てくれました。この農夫は不安に苛まれて言いました。「フォルケニングさん、私は神様に立ち返らなければならないと思います」と。そこでフォルケニングはこう言いました。「歳をとると人は慌てるようになります。危機に陥ると神に助けを求めます。しかし、そういう時の悔い改めは本物ではありません」。彼はこう語るとさっさと帰ってしまいました。この農夫は、再び非常な怒りを覚えました。牧師ならもっと優しく話してくれてもよさそうなものだと思いました。しかしフォルケニングは神の御前にしっかりと立ち、自分の発言が間違っていないことを知っていました。

三日後に農夫は危篤状態になりました。その時、彼はわかっ

たのです。「私はもうすぐ死ぬ。今までの私の一生のどこに、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制があっただろう」と。彼はそれまでの人生で、自分のために死んでくださった救い主をさげすみ、いつも彼に愛を注いでおられた主を邪魔者扱いしてきたのです。

今や彼は地獄の淵に立ち、絶望の中にありました。彼は再び妻にフォルケニングを呼びに行かせました。訪ねて来たフォルケニングはこの農夫の変化に気づきました。

思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。（ガラテヤ　6・7）

フォルケニングは病床に近づいて言いました。「このままではあなたは地獄行きです。さあ、ご一緒にゴルゴタの丘へ行きましょう。イエス様はあなたのためにも死んでくださったのですよ」。そして彼は、イエス様がどのようにして罪人を救い出してくださったかを、優しい口調で語り始めました。

「まず、『自分が罪人である』ということをはっきりと認めなければなりません。『私は正しい。私は誰も恐れない』と言うのを止め、真理の中に立たなければなりません。そうすればイエス様は、あなたを救うことがおできになるのです」と。すると農夫は、瞬時に次のことを認め、悟りました。「イエス様は、この私のために十字架上で死んでくださった。罪の負い目を赦してくださった。だから、私は、神様の前で正しいと認められるのだ」と。そしてこの農夫は初めて正しいお祈りをしました。「神様、私のような罪人を憐れんでください。主イエス様、私を地獄の淵から救ってください」。フォルケニングは、主イエス様を呼び求める一人の人間をその場に残して、静かに立ち去りました。彼は、胸をなでおろしたのです。聖書には、イエス様の御名を呼び求める者はだれでもみな救われる、と書いてあるからです。

次の日彼が訪ねてみると、そこには神との平和を得た人がいました。「いかがですか」と彼が尋ねると、この農夫は答えました。「イエス様は、恵みによって私を受け入れてくださいました」と。

一つの奇跡が起きたのです。このようにして、一人の高慢な農夫が、新しい神の子どもに生まれ変わったのです。聖書には、次のような記事があります。イエス様はユダヤ人の指導者ニコデモの質問に答えられました。

「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。**「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができましょうか。」**イエスは答えられた。**「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。」**（ヨハネ　3・3〜5）

「新しく生まれる」ことこそ、キリスト者の「個人的な側面」です。人は狭い門を通って初めて真に生きるようになり、神の大いなる奇跡によって新しく生まれ変わるのです。それは何も神学的な理論ではなく、あなたご自身が救われることの単純な事実です。どうか、このことをイエス様から直接受け取ってください。あなたが死を目前にした時、フォルケニングのような宣教師は傍にいないかもしれません。しかし、どのような情況にあっても、新しく生まれるためには「自分が失われた者であり、自分の心は悪である」ことを神の前で素直に認めることが、どうしても必要です。新しく生まれるためには、この世で唯一の救い主であるイエス様を「呼び求める」ことが必要です。ですから、新しく生まれるためには、救い主であるイエス様にはっきりと告白しましょう。

私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。（ルカ　15・18）

それに対して主なる神は次のように約束してくださって

います。

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ　1・9）

人が新しく生まれるためには、自分自身をイエス様に明け渡すことを決断しなければなりません。また神は、新しく生まれた人には例外なく聖霊をくださいます。聖書はその人を「額に印を押された者」と表現しています。新しく生まれることなくして神の国に入ることはできません。そして新しく神の子どもとされた人々は、そのことを体験的に知っています。溺れかけた人は、水から引き上げられ、呼吸ができるようになって初めて、自分は救われたのだとわかるのです。

以上が、キリスト者としての「個人的な側面」です。自分が死からいのちに移されるためには、このことを個人的に体験しなければなりません。私自身の人生を振り返る時、主イエス様のものとされたことは本当に奇跡だと思います。私は神から遠く離れて罪の中で生きていました。しかし、イエス様の方から私の人生に入って来てくださいました。そのお蔭で私は主に従うようになり、他の人々が滅びに向かわないように警告し、イエス様のみもとに招きたいと願うように生まれ変わったのです。

あなたが新しく生まれ変わると、次のように感謝できるようになります。「救い主である神様の子どもになるとは、何とすばらしいことだろう。私がイエス様のものとなり、イエス様が私のものとなられる。そのことをこの私が証しできるとは」と。

しかし、新しく生まれ変わることは、信仰のゴールではありません。その人は、やっとキリスト者としての個人的体験のスタートラインに着いたばかりなのです。私が主に立ち返った時、次のように思いました。「助け手である神の声を毎日聞かなければ、私は生きてはいけない」と。このようにして私は聖書を読み始めました。聖書は牧師しか読まない本だと思っている人々がいます。わが家の近くに駐車場があり、そこで私が毎朝歩きながら聖書を読んでいるのを近所の人たちは見ていました。てっきり牧師が説教の本でも読んでいるのだと思われていたようですが、まだ牧師にもなっていなかった私は、ただ聖書を読んでいただけでした。聖書は誰にでも読めるのです。

私が牧師になり、若者を対象とした集いを開くようになると、必ず朝食前に皆で十五分間の静かな時を持つようにしました。まず賛美の歌を一曲歌い、次いでその日に示された聖書の章を読みます。その後、各自が聖書から一箇所を示され、自分の席に着いてその箇所を熟読します。イエス様を信じ始めた人たちは、いつの間にか自宅でもそうするようになります。良い羊飼いであるイエス様の語られる御声を聖書から直接聞き、イエス様とお話をしないでは、もはや生きて行けなくなるのです。どうかあなたも、新約聖書を読み始めてください。朝か夜に十五分間の静かな時を持ち、主なる神からキリスト者としての元気をいただいてください。そして、聖書を読み終えたら、次のように言ってみてください。「主イエス様、あなたとお話をさせてください。今日はすることが沢山あります。どうか助けてください。私が陥りやすい罪から守ってください。周りの人々に愛をもって接することができるように、聖霊で満たしてください」と。

あなたがこのように祈ると、イエス様は必ず聞いていてくださいます。キリスト者は常に主と話すことにより、生きた信仰を継続して実感することができるのです。

最近、信仰を持ったある人に、毎日イエス様と十五分間の静かな時を持つようにと伝えたところ、その人は言いました。「私はあなたのような牧師ではありません。牧師にはそのための時間がおありでしょうが、私には他にすることが山ほどあります」。そこで私は尋ねました。「あなたは、そんなに沢山することがあって、その日のすべての問題をうまく切り抜けられるのですか」と。彼は「実は、できないのです」と認めたのです。私は答えました。「それは、神の前に静まる時を持たないからではないでしょうか」。そして、こう話しを続けました。「毎朝イエス様に話しかけ、聖書の何章かを読み、それについて祈るということに慣れると、一日が楽に切り抜けられることを体験なさる

でしょう。忙しければ忙しいほど、静まるための十五分間が必要となります。そのうちに、それが三十分に延びることになるでしょう。一日の始めに、救い主にあなたの悩みごとをすべてお話すると、不思議に全てがうまく行き始めます。私は自分の体験からそう言うのです。私も同じように、朝から一日中忙しく走り回ってうまく行かなかった時、『そうだ。今日はまだこのことをイエス様にお話ししていなかった。だから主が私に語ることもできなかったのだ。うまく行かなくて当たり前だ』と、突然思い当たることがありました」

イエス様と共に静かな時を過ごすことは、キリスト者の個人的な体験として非常に大切です。やがてあなたは、罪に陥りやすい肉の思いを日々十字架につけるようにイエス様が求めておられる、と気が付くでしょう。

私は、たくさんの人々と話しますが、どうも人間はだれもが不満を持っているようです。妻は夫に、夫は妻に、両親は子どもに、子どもは両親に、何かしら文句を言いたいのです。誰かを指さして、「私が幸せでないのは、あの人のせいだ」と言いたいのです。しかし、誰かを指さす時に、気を付けて自分の手を見てください。人指し指は相手の人を向いていますが、残りの三本の指は、私自身を指しています。十五分の静まる時を持ち始めると、全ての不幸の原因はあなた自身にある、とイエス様が明らかにしてくださいます。あなたの結婚生活がうまく行かないのは、神の御前にいるように生きていないからです。あなたの仕事がうまく行かないのは、神の御前を歩んでいないからです。キリスト者は、毎日、自分の生まれつきの悪い性質を十字架につけることを学ばなければなりません。

ここで私の体験をお話しましょう。最近、大勢の宣教師仲間といっしょに八日間にわたる若者の集いを開きました。この共同生活は非常に祝福され、幸せな時間を共に過ごすことができました。しかし時には、活動方針について意見の相違と対立がありました。そして最終日の聖餐に預かる前に、この問題についてお互いに胸を開いて話し合うことができました。私は意見が対立した三人の仲間の所に行って謝りました。私が強い口調で主張したことを詫びたのです。三人の仲間は、「よく考えるとあなたの方が正しかった、だから謝る必要はない」と言ってくれました。

この問題について私が先に謝ることには少し勇気がいりましたが、謝るまでは心に平安がありませんでした。このような仲直りと問題の解決も、イエス様の助けの一つです。

イエス様と語る静かな時を持つようになると、日々自分の中の生まれつきの性質、肉の性質を十字架につけることを学ばされます。少しでもそれができると、心がすっきりします。この変化は、イエス様を信じて初めて知ることのできる喜ばしい体験の一つです。信者の中でこのような体験をしたことのない方は、信仰を持っているとは言えないのではないでしょうか。

私は町を歩いていてふと考えます。町を行き交う人々は、教会に献金をしている点ではほとんどの人がクリスチャンです。もしその中の一人に「あなたはクリスチャンですか?」と聞くと、「もちろん。私は回教徒ではありません」と言うでしょう。さらに続けて「あなたは、自分がキリスト者であるという喜びで眠れなかったことがありますか?」と聞いたとします。するとその人はきっと、「この人は頭がおかしいのではないか」と思うでしょう。これが現実の姿なのです。現在この世に溢れているのは「キリスト者であることの喜びが伴わないキリスト者」です。ほとんどの人は、教会に献金しなければならないことに不満を感じ、日々の生活の中で信仰の喜びなど全く感じていません。しかし、あなたが新しく生まれ変わることを体験されると、次のみことばが自分のものになります。

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。
（ピリピ　4・4）

最近、私は教会に集っている若い人々に、次のすばらしいみことばを伝えました。

しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにはね回る。
（マラキ　4・2）

私は、このことばのように神の前で喜んで子羊のように跳ね回るキリスト者に会ったことは、滅多にありません。なぜでしょうか。たぶん、私たちが本物のキリスト者だとは言えないからではないでしょうか。私は母のことを思い出します。彼女は主の前で、このような大きな喜びを感じていた人でした。母以外にも私は喜んでいるキリスト者たちを知っています。私は年齢を重ねるに従って、主にある喜びをもっともっと体験したいと願うようになりました。そのためには、キリスト者として真剣に歩むことが要求されます。信仰の喜びを深く体験するには、ほんの僅かな信仰があればそれでいいというものではありません。

以上見てきたことが、キリスト者の「個人的な側面」です。冒頭で述べたように、「信仰を持つことは個人的な問題か?」という質問に対し、「信仰は非常に個人的なものだ」というのがその回答です。

それでは、次にもう一つの側面について考えていきましょう。本物の、生きたキリスト者としての信仰には、周りのすべての人々にわかるような「公的な側面」が存在します。

信仰の公的な側面

イエス様を信じるようになると、その人は自然に他の信者の群れに参加するようになります。キリスト者はこの信者同士の交流を「交わり」と言います。この信者同士の「交わり」は非常に大切であり、真のキリスト者であれば、他の人たちと共に主の祝福を受けたいと思って群れの仲間入りをします。

毎週日曜日には礼拝がありますが、礼拝に出席しない、つまり聖餐には預からない、という人がいます。ラジオ放送を聞いているからとか、最近ではテレビ画面の中継を見て礼拝に参加しているからとか、あるいは聖歌隊の練習で忙しいから、という人もいます。しかし病気ならともかく、真の信仰者なら礼拝には必ず参加すべきです。

紀元三〇〇年頃、ローマ帝国の皇帝はディオクレティアヌスでした。彼は、かつては奴隷でしたが、解放されて後、ローマ帝国皇帝の座にまで上りつめました。当時、キリストを信じる信仰はすでにローマ領内に広まっていました。ディオクレティアヌス帝は、前の皇帝がキリスト者を迫害したことを知っていましたが、彼自身は国民に信仰の自由を認めようとしました。これは皇帝としては珍しい考えでした。ディオクレティアヌス帝には後継者と目されているガリレウスという若い共同統治者がいましたが、彼は皇帝にこう言いました。「キリスト者を放っておくと、きっと混乱が起きるでしょう。彼らはいつもイエス・キリストを最高の王として崇め、そのことを人前で告げています。反乱になる前に何か手を打つべきではないでしょうか」。ディオクレティアヌス帝は、答えました。「過去の皇帝たちは二五〇年以上もキリスト者を弾圧してきたが、いまだに決着がついていない。だから私は何もするつもりはない。放っておくつもりだ」と。この皇帝は賢明でした。

しかしガリレウスは食い下がりました。「キリスト信者は特別な存在です。彼らには他の人にはない聖霊があると主張していますし、彼らだけが祝福されるとも言っています。非常に思い上がった人々です。早急に何らかの手を打つべきです」と。ディオクレティアヌス帝は、キリスト者の迫害には同意しませんでしたが、最後には執拗なガリレウスの主張に負けて、キリストを信じる信者の集まりを禁じる通達を出すことにしました。「キリストを信じることは自由、しかし信者が集まることは一切禁止」と定められました。この法令に違反すると死刑になります。これを知った教会の長老たちは集まって議論した結果、「この新しい法令に従うべきだろう。自分の家で自由に信仰を保っていけば、何の処罰にも会わないのだから」という結論に達しました。

しかし、大多数の信者たちは次のように主張しました。「祈りと賛美を捧げ、説教を聞くために皆が集まることは、キリスト者にとって無くてはならないものだ。私たちは今までどおり集まろう」と。そして彼らは今までどおり教会に集いました。これを見たガリレウスは、再び皇帝に直訴しました。「ディオクレティアヌス様。キリスト信者たちは、やはり国家の反逆者です。彼らは法令に従おうとしません」と。その結果、キリ

スト者に対する残虐な迫害が起こり、多くの殉教者が出ました。またその一方で、教会に集まることを止めて自分の命を救う道を選んだ信者も多かったのです。そして教会は、集会に来ない信者を脱落者であると宣告しました。

今日のキリスト者の中には、このような脱落者が大勢います。当時の信者が皇帝の通達に反逆したのは正しい行為でした。聖書には次のようにあります。

ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。（ヘブル　10・25）

ですから祝福されたいと願う方は、真剣にキリスト者でありたいと願う人々の群れの中にぜひ加わってください。信仰の公的な側面を大切にすることもまた、信仰者には大変重要なことなのです。

キリスト者の集いで人々に溶け込み、親しく語り合うにはどうすればいいでしょうか。人々との接点を見出すにはいろいろな方法があります。まず、定期的に開かれている信者の集いや若者の集い、家庭で開かれる聖書の集い、また各地で開かれるバイブル・キャンプなどに参加してみることです。そこでは皆が心を開いて語りかけてくるし、あなたもいつの間にか、いろいろと語っている自分に気がつくことでしょう。あなたが主にある交わりを求めているなら、主に祈り求めてください。「どこに行けば交わりを持つことができて、イエス様のことをもっと知ることができるのですか」と。大切なことは、「救い主について本当に知ることのできる場所」に行くことです。主イエス様を慕う人々は、この世では少ないかもしれませんが、あらゆる所にいます。

信者同士の交わりがなければ、信仰は死んだものになってしまいます。そしてキリスト者の集まりは、次の四つのことが前提です。「第一、賛美すること。第二、開くこと。第三、祈ること。第四、捧げること」。初代教会のキリスト者は、すでにそのような集会を開いていました。神に人生を捧げた信仰は、それらの交わりを通して証しされ、表にあらわれます。キリスト者の信仰は、他の信者たちとの交わりを常に必要とします。聖書には次のように書かれています。

私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。（1ヨハネ　3・14）

私は、ビーレフェルトという町で初めて伝道師の助手を務めた頃のすばらしい体験を思い出します。礼拝には少数の人しか集まりませんでした。しかし私たちは、神を信じない自由主義者の人々と、土曜日の夜の食堂で話し合うことができました。夜中に閉店した食堂から外に出ると、百人ぐらいの工場労働者に取り囲まれ、彼らにいろいろと話しかけられ、質問されました。それは今までに無い経験でした。いつの間にか私たちは熱い質問に取り囲まれ、私はそれに答えていきました。イエス様が地上に遣わされたこと、人間は決して幸せではないこと、罪のない人は存在しないこと、永遠のいのちがあり、神の裁きがあることなど、私が信じていることを次々に話していったのです。

夜中の二時を過ぎたので、私は言いました。「明朝九時半から礼拝があります。私は準備のため帰らなければなりません。あなたたちが人の目を恐れていないのなら、その礼拝に出席しますよね」。目の前にいた若者が言いました。「私が恐れているって？とんでもない！」。私は彼に尋ねました。「あなたは無神論者でしたね。そのあなたが日曜日に教会に行ったことが皆に知れたら、翌日職場で大騒ぎになりませんか？」。ところが彼は日曜日の朝、賛美歌集を脇に抱えて教会に現れたのです。そして月曜日の夜、私の所に来てこう報告しました。「やはり、あなたは正しかった。私が教会に行ったことで職場の連中は憤慨していました。でも私は、我々がいつも自由、自由と大声で叫んでいるが、その実は哀れな囚われ人だということに気がついたのです。自由思想の本も捨てました。イエス様のことをもっと聞かせてください」。彼は私が担当した若者の中で、初めて神に立

ち返り、回心した人となりました。

そもそもの発端は、彼が私たちの小さな集いの礼拝に来たことです。彼が集会に来るようになったので、周りの人々も来るようになりました。イエス様への扉が開かれ、主の祝福が溢れ始めました。そして、新しい人々が次々と集会に来て信仰に入る決心をしました。ですからあなたもイエス様のこと、救いのことを知りたければ、まずキリスト者の集いに加わることをお勧めします。

第二の「信仰の公の側面」は、信仰を「口で告白する」ことです。ドイツでは、私たちは教会税を払っていればよい、福音の伝道は牧師の仕事だ、と思われているようですが、そうではありません。私はすべてのキリスト者に次のことを知ってもらいたいと思います。福音の伝道は牧師だけに任せておくのでなく、各人が置かれている職場や学校などで、イエス様のことを宣べ伝えなければなりません。あなたは人の前で次のように信仰の証しをしたことがありますか。「イエス様が今も生きて働いておられるのは事実です。私たちはイエス様のものです」と。私たちが救い主イエス様について証しをする勇気を持たない限り、本物のキリスト者であるとは言えません。

後に来る裁きの日に、キリスト者がイエス様に向かって「私はあなたを信じていました」といくら言っても、イエス様が父なる神に「私はこの人を知りません」と否定される、としたらどうでしょうか。イエス様は「あなたの周りの人々は、自分が地獄に直行していることを知らなかった。しかしあなたはいのちへの道を知っていた。それなのにあなたは人々に警告しなかった。救い主を証しすべき時にもあなたは口を閉じていたではないか」と責められたら、あなたはどうしますか。あなたは「私はまだ信仰が弱かったので、できませんでした」と答えるかもしれません。しかし、主は続けてこう言われるでしょう。「あなたのその弱い信仰を告白すればよかったのだ。たとえあなたの信仰は弱くても、救い主は強い。信仰についての自分の考えを告げるのではなく、ただこのわたしのことを告げ知らせればよかったのだ。わたしはあなたを知らない」と。

> わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないという者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。
>
> （マタイ　10・32〜33）

これはイエス様が言っておられることです。イエス様は決して嘘は言われません。私たちは一体いつになったらイエス様を証しする勇気が持てるのでしょうか。

最近、私がルール地方のある町の講演会で話した時のことをお伝えします。この講演会を開いたのは、グスタフという私の友達でした。彼は自動車工場に勤めていて、今はイエス様のことを大いに喜んでいる頼もしい証人の一人です。彼は、ここぞ、という時にイエス様への信仰を臆さずに告白する男です。月曜日の朝、自分の職場の自動車工場に出勤すると、仲間たちは日曜日をどのように過ごしたかで盛り上がっていました。話題の多くは酒を飲んで騒いだとか、女の子と遊んだとかといったことでした。

当時まだ見習い工だった彼は、この連中に「何をしていたか」と聞かれて、午前中は礼拝、午後はブッシュ牧師の青年会に出ていたことを伝えました。すると皆がこぞって彼をからかいました。その時、彼は怒りを覚えて次のように思ったのです。「破廉恥なことは平気で話せるのに、どうして救い主のことは自由に話せないのだろうか」と。そこで彼は、若い同僚たちに次のように話し始めました。「このままだと君たちは地獄に行くしかないよ。だから僕と一緒にブッシュ牧師の青年会に行こうよ。そこではイエス様のことが聞けるのだから」と。

その見習い工グスタフが、後年マイスター（親方）の試験に合格し、工場を去ることになった時には、町に大きな変化が起きていました。大勢の見習い工たちは私たちの青年会に入っていました。ＹＭＣＡに行っている職人も数人いました。工場の中では、もう誰も卑猥な話をしませんでした。新人が入って猥褻な話をしようとすると「グスタフが来るから、黙った方がいいよ」と注意されました。皆は、彼に敬意を払うようになったのです。今や彼は

大きな工場の支配人となっています。神はそのように彼を祝福されたのです。

再び、お尋ねします。果たして私たちキリスト者のうちの何人が、口を開いてイエス様について告白する勇気を持っているでしょうか。それができるようになると、私たちは霊的にも成長します。

キリスト者の信仰とは、個人だけの問題でしょうか。いいえ、それだけでは十分ではありません。私たちは世界中にイエス様を証しする責任があります。控えめに、惨めに、黙っているのはやめましょう。さもないと、裁きの日にイエス様は「あなたなど知らない」と言われるでしょう。

第二次世界大戦のさなかには、十六、十七歳にすぎない青年会の若者たちが、大勢徴兵されました。私はそのたびに彼らに聖書を贈って、次のように伝えました。「君たちは、最初の日から厳しい訓練に向かう前に必ず、皆に見えるように聖書を開いて読みなさい。一つの聖句でもいいから口に出して言いなさい。そうすれば、主がどれだけ大きなことを成してくださるかがわかります。君たちが初日にそれをしなければ、後になればなるほど、難しくなりますよ」と。そして、彼らは私が勧めたとおりのことをしました。初日に聖書を開くと「何を読んでいるのだ」と聞かれ、「聖書です」と答えたとたん、まるで何かが爆発したかのような騒ぎとなりました。聖書以外なら何でもよかったでしょうに。

彼らの中の一人、ポイレの場合は（残念ながら後に戦死してしまったのですが）、翌朝自分の所持品を調べてみて、聖書が無くなっている事に気づきました。周りを見渡すと、皆が訳あり顔をしていたので、「誰が僕の聖書を持って行ったか、知ってるかい」と尋ねると、「曹長殿だ」という答えが返ってきました。この曹長は、口やかましく、厳格で、兵士たちの誰からも恐れられていた人でした。そこでポイレは「これはただでは済まないぞ」と覚悟して、その日の訓練が終わった後、静かな片隅でこう祈りました。「主イエス様、私は孤独です。まだ十七歳です。私を見捨てないでください。どうかあなたのことを証しし、皆に話せるように助けてください」と。こうして彼は曹長の部屋に行き、ノックしました。

曹長は、机に向かって座っており、その机の上には聖書が置いてありました。「用件は何だ」と聞かれて、彼は「曹長殿、お願いします。聖書をお返しください。その聖書は私のものです」と答えました。曹長は聖書を手に取ってページをめくりながら言いました。「ああ、この聖書はお前のものか。これは大変危険な本だということを、お前は知らないのか」。ポイレは答えました。「はい、おっしゃるとおりです。聖書は非常に危険な本です。密かに奥にしまい込んでおいてさえも、非常に心が揺さぶられる本です」。曹長は、襟を正してこう言いました。「ここに座れ。俺も一度は神学を学ぼうとしたことがある人間だ」。ポイレは尋ねました。「では、曹長殿は信仰から離れられたのですか」。それからしばらくの間、この四十歳の人物が十七歳の若者と話すことになりました。「俺は心の底ではとても悲しいが、もう後戻りはできない。この歳だと立場上、たくさんのものを手放さなくちゃならないからな」と。そこで、若者は答えました。「曹長殿はお気の毒ですね。しかし、イエス様は、どのような犠牲を払ってでも、しっかりと繋がっている価値があるのではないでしょうか」。曹長は最後に「お前は幸せな奴だ」と言って聖書を彼に返してくれました。こうして、それ以降は誰も、何も言わなくなりました。

このような勇気を持っているキリスト者は、どこにいるのでしょうか。キリスト者の信仰は、個人だけの問題に留まりません。たしかに、新しく生まれ変り、信仰生活を送ることは各人の心の奥底の問題です。しかし、それだけでは十分ではありません。キリスト者たちは、礼拝、家庭集会、青年会、女性の集いや男性の集いなどの交わり会に出るようになります。キリスト者は、口を開いてイエス様のことを語り、信仰を告白します。それによってこの世の人々は、主がイエス様を通してキリスト者の心に火をつけたことを知るのです。

神と共に歩む人生

主は、いつも戸をたたいておられます

山田 洲生（くにお）



妻の公代さんと

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（黙示録　3・20）

二〇一〇年十月、ドイツ喜びの集いに参加し、七十歳にして主に導かれ救われました。「かくも永き不在」という題名の名映画がありましたが、私の場合は「かくも永き主の不在」でした。

私は、一九四〇年に東京で生まれました。一人っ子で両親は大切に育ててくれました。四十五年前、上司の紹介で、勤め先の石油精製工場のある三重県尾鷲市出身の家内と結婚し、二人の娘を授かり今日に至っております。大学を卒業し就職するまで湯島天神のすぐそばの下町で過ごし、三年ほど名古屋にいただけで、人生のほとんどを東京で過ごしてきました。

主イエスはこの十年ほど、あるときは厳しくあるときは優しく私たち一家を導いてくださいました。家内と母は信仰をもっていましたので、長女も次女もごく自然に信仰に導かれたようです。私は一人っ子の特性か、自分のことは自分で解決する志向が強く、自我が砕かれていない状況で、自分以外のものには甚だ思いやりが少なかったのではないかと思い返しています。また、問題解決を探る過程でいくつものケースを想定し、最悪の結果に備えるなど、よく言えば慎重、悪く言えば臆病、この世の生活でぼろを出さないよう仕事でも家庭でも石橋をたたいてきた、と思います。

また、眼に見えないものに思いを巡らすことは少なく、したがって、死後のこと、死に対する恐怖も他人ごとのように思えて、主イエスの世界とは縁のない生活を送ってきました。

しかし、主の誘いは思わぬ方向から、それも何段階にも分けて、周到にやってきました。今から十一年ほど前の暮、家内は体調を崩し、甲状腺機能亢進症と診断され翌正月三日に入院しました。精密検査の結果、甲状腺腫瘍で手術が必要とのことでした。仕事にかまけ、家内が衰弱していたことに最後まで気がつかなかった自分を責めたものです。手術後退院、再入院を経て、回復したのは桜のつぼみが大きくなった頃でした。この病気を通して吉祥寺集会に集われていた兄弟姉妹と私との接点が生まれ、また祈りと励ましが家内には特効薬であるのがわかりました。良性とはいえ癌には相違なく、お互のどちらかが突然奪い去られるかもしれない現実に直面させられ、私は会社での仕事が一区切りついた二〇〇二年に退社しました。

しばらくの間、リタイアした高校・大学時代の友人や会社の暇になった連中と、北海道、沖縄、果てはグアムなどへゴルフに出かける一方、ドイツ、沖縄、札幌などで開かれた集会のキャンプにも観光を主目的に参加するなど、無節操、無信仰そのものの生活を享受してこの世を楽しんでいました。私は何の束縛も受けず自由であると思っていました。

しかし、転機が訪れました。二〇〇七年六月、私には二度目のドイツ喜びの集いに家内と参加して、開催地のミヘ

ルスベルグで二週間楽しいときを過ごし、帰京した数日後の月曜日朝、家内は強烈な腹痛に見舞われました。病院の救急外来から内科へ、そして午後に外科へ移されたときには、あまりの激痛で失神していました。医師は緊急手術が必要だがそれに耐えるかどうか、家族を呼んだほうがよいのではとも告げ、わずか一日での状況の激変にうろたえました。病名は腸閉塞でした。当日は手術の予定が立て込んでおり、緊急とはいえすぐにはできない状況とのことでした。思いがけず一つ前の手術がキャンセルになりましたが、待機していたスタッフが手術に取り掛かったのは午後七時過ぎでした。その間、大勢の集会の兄弟姉妹が駆けつけてくださり、次々にお祈りしてくださったので、私も促されて「御心のままに」と思わず口にし、義兄も「できることなら身代わりに」と祈っていました。

九時半ばに、執刀医が切除した腸を乗せた大きなステンレスの盆を持って出てきて、手術自体は無事に終わったこと、ただし腸の四分の三を切り取らざるを得なかったこと、その結果残った部分では体が必要とする養分を摂取できない恐れがあり、点滴で補給せざるを得ないこと、「短腸症候群」のため余命は二ヶ月から長くて五年半、よくても点滴をはずせない植物人間的な生活になるかもしれない、との説明がありました。

この説明は、私たち家族に大きな衝撃を与え、しばらくは自失してしまうほどでした。手術後集中治療室に入ったのを見届け、義兄と共に深夜帰宅、家内が突然抜けた家の中の普段どおりのたたずまいに、違和感を覚えたのを思い出します。

それからの日々は、朝から晩まで病院に詰めかけ、朝、夕の回診に立ち会って医師の言葉を些細なものまで聞き逃すまいとの毎日でした。執刀医と担当医は別人でしたが、意を決して短腸症候群の兆候が出ていないか聞きただしました。医師は「大丈夫、退院できるように頑張る」といってくれたので若干ほっとしましたが、家内のささいな体調の変化にも本人以上に神経質になり一喜一憂していました。

手術から一週間目に医師から、緊急の状態は脱したこと、

今後は退院後の在宅治療の方向を検討すると聞かされ、愁眉を開きました。さらに二週間目には、点滴をはずし栄養は口から摂取するようにとのことで、この頃から内科の医師も含め何人もの医師から「奇跡的回復」といわれるほど順調に推移しました。

六月二十五日に入院して七月十七日退院、約三週間の入院生活でしたが、その間大勢の兄姉方にお見舞いいただき、毎日午後の二時から三時ごろは面会ロビーでミニ集会がもたれているようでした。そこは、すべてを神に委ねた暖かく、穏やかな空気に満たされていました。そんなわけで私も集会の方々とお話しし、お祈りにも加えていただくようになりました。四六時中イエス様の脇にいるような気分になっていました。またメール、お手紙による慰めもたくさんいただき、本人には何よりの力づけ、薬となって回復が早まったものと思われます。

家内の病気は、私の内面にも大きな影響をもたらし、普段のときにも家内のことを祈るようになりました。もっとも祈りの中で「もし神が存在するならば」と口にするなど、及び腰ではありましたが。そんな中、七月十九日の中町の家庭集会でお礼の挨拶をした際に、「主の恵みか」と思わず絶句したことを思い出します。

退院後は、幸いにして点滴を常時する必要はなくなりました。しかし、体調が元に戻るとは考えられない状況で、家の周辺の散歩から始まり徐々に身体を慣らして、私の付き添いがあれば集会にも外出できるようになり、一進一退はあるものの体調はそれなりに守られてきました。

しかし私の頭には医師の言葉が残っていて、家内と一緒にいられるのはせいぜい五年、その間、家内の一番好きな御代田の福音センター近辺で夏をゆっくり滞在させたいと思い、三年前の春、ハイラーク西軽井沢の一室を入手しました。こうして足繁く御代田に通うことになり、私自身が主に近づき救われる結果となりました。主の周到なご計画と恵みを思い知らされています。

ここで家内の兄、大江暢博が急逝した前後に、主が私たち

8 人の証し Unser HERR lebt

家族一同に賜ったご愛と恵みに触れたいと思います。家内の母は当時九十四歳をすぎてケアハウスに入居していました。日ごろ、家内と長女に連れられて家庭集会に参加していましたが、家内の発病で私と兄が交代で石神井と中町の家庭集会へ連れて行くことになり、それが契機で兄も集会の方々と交わるようになりました。

兄は自由闊達な人で酒と音楽をこよなく愛し、この世の制約の中でも心の自由をいつまでも失わない人でした。その性格もあって家族、親類、同僚、友人はもとより集会の皆さんにまで愛され、最後の最後に神様にも愛された本当に幸せな人でした。

幼い頃からクリスチャンの母に連れられて日曜学校に通い、聖書をよく読んでいたようです。私と酒を酌み交わしながら語る人生論では、神に話が及び、イエス様のことを冷静に理解していること、「俺の心の中にキリストがいる」などと申していました。

一月十五日、田中順治兄の母親の葬儀に、入所中の母の代理で参列した兄は、ことのほか感銘を受けたようでした。帰途、兄はケアハウスに寄り母に報告し、そのあと私の家で酒を飲みながら繰り返し嬉しそうに、悲しさの中にも故人の昇天を心から賛美する葬儀での遺族の姿、またベック兄のメッセージに神の愛と救いと希望の確信を得たと、話していましたが、これが私たちと兄とのこの世での最後の交わりでした。

亡くなる前日の二月五日午後、兄は、友人と会食する途中だと言ってケアハウスに寄り、賛美歌のCDをかけ、母と何曲も繰り返し歌ったとのことです。翌六日、私は出先で家内から「兄が急死して、もう冷たくなっている」との急報を受け、駆けつける電車の中で、晩年の彼の心境にふさわしい葬儀をしたいとばかり考えていました。

葬儀は未信仰の義姉と長男洋一の同意を得て、吉祥寺集会所でベック兄の司式で執り行われました。大勢の兄弟姉妹、学友、故郷から駆けつけた人々に囲まれ、悲しみの中にも暖かく平安に包まれた葬儀でした。主はご計画どおりすべてを

整えてくださいました。残された母をはじめ私たち家族一同、兄は主に救われ昇天した、と確信しました。

四年前に立て続けに起こったこの家内の病と兄の昇天で、その直後の一年ほどは私たちの生活もずいぶん変わりました。家内が通常の生活に戻ることは不可能であり、家事のおよそは私がしなければと気を張って毎日を過ごしていました。以前のように家内を一人置いて外出するのも気がかりで、その結果は友人、知人たちとの交流も極端に少なくなって、二人だけで過ごす時間の長い毎日でした。

幸いにも一年経った夏ごろには、食事の制限はありましたが疲労しない程度の外出、外泊も可能となるほど回復して、集会への集いも以前と同じように参加できるようになり、私も付き添いの形で、兄姉らと過ごす機会が多くなりました。

このような経過をたどって昨年の夏には御代田で二度のロングキャンプを含め、全キャンプに皆出席という恵みに預かり、私たちは集会の集いの中にどっぷり浸っていました。

四年前の出来事を経て、私は神の誘いに従って信仰の門をくぐったはずで、その後はずっと礼拝をはじめ各集会、キャンプ等ほとんど皆勤で、毎朝毎晩祈るなど、外見はクリスチャンそのものでした。しかしその実態は違っていました。この世にまみれた七十年間の残りかすから脱却することは本当に困難でした。まして家内の回復で主への感謝が薄れ、またぞろ自制心がほころび始め相変わらず自我が強く表面に出て、すべて神に問いかけることもなく行動し、以前の道に戻りつつある自分に愕然とする毎日でした。最強にして最大の敵は自分自身の中に巣くっていました。集会の兄姉はもちろん世間も当然クリスチャンとして私に接してくださるようになりましたが、そのこと自体が苦痛であり、信仰の失せた形骸でしかない偽クリスチャンの私には心を攻められるような日々で、それでもクリスチャンに成りきれない自分の中での葛藤が始まりました。さりとて、神に祈り、訴えることすらしないありさまでした。

その半年ほどは真夜中に眼を覚まし、二つに割れた自身の

8 人の証し Unser HERR lebt

心に思いを凝らすと眠れない日々が続きました。そのような中で昨年十月、ドイツ・フィリンゲンの喜びの集いに参加しました。家内の体調もよく、二人で参加できるのはこれが最後かもしれないとの思いもあって、主治医と相談のうえ二週間の日程（AB班）で参加しました。

実は、私はこのキャンプで、中途半端な信仰のまま進むのか、元の世界に戻るのかの決着を付けようと強く考えていました。家内は長時間の移動、食事の変化にも適応でき、フィリンゲンでの日々は主にある集いと交わりでゆっくり過ぎてゆきましたが、心の中はなかなか決着を付けられない自分のだらしなさに腹立ち、苛立ちを表面に出さないように気を張っていました。しかし主は私を見放さず根気強く導いてくださいました。

A班が帰国しB班が来るまでの二、三日、ベック兄は体調が思わしくないにもかかわらず、朝晩四回ほど聖書のメッセージを語ってくださいました。夜の懇談の席で、私は何かに突き動かされたように、自分が今や偽クリスチャンであること、常にこの世に戻りたがる心の葛藤を率直に話しました。また、ある姉妹から信仰について証しをするよう助言をいただいたことに反発して、証しはある種の、自己陶酔、自己憐憫に陥りやすい麻薬であるなどと放言して、その後で反省したことがありました。主が私の心を暴いてくださる結果となりました。

翌朝、朝食のときベック兄が近寄って来られ「くにお、今朝の集会の司会をしなさい」と言われ、偽クリスチャンの私がしてよいものかなど余計な思いが交錯しましたが、なんとか真っ当に司会を務めることができました。このことがあってから以前にもまして、兄弟たちに心から交わっていただけるように感じました。

それでも「心の決着」はつかず、B班が来てキャンプの後半には「まあいいや」といささか投げやりに過ごしていました。

明日は日本に帰るという日の朝、またもやベック兄は私に司会を命じられました。大勢の兄姉の前に立ったとき、

なぜか自分の悩む本心をさらけ出す最後のチャンスだと、現在の信仰の有態、心境を話し出しました。そしていつの間にか主に立ち返りたいと述べていました。心の決着がつきました。まさに「主が働いてくださった」ことだと思います。今思えばベック兄は私の葛藤を見抜いて、皆の前に立つ資格もない私に司会を命じ、再び神の前に立てるように導いてくださったと確信し、感謝の気持ちでいっぱいです。また、証しとは、当人に主がどのようなご計画で恵みと哀れみをくださったかを聞く人々に伝えるだけでなく、むしろ証しすることによって自己の内面を見つめなおし、主にますます委ねることだ、と諭してくださった姉妹に感謝とお詫びを申し上げます。

私は主のみからだであるこの集会と集会に集う兄弟姉妹が大好きです。家内ともども再臨の日までご一緒に歩んでいきたいと心に決めております。

8人の証し

Unser HERR lebt

そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

（使徒　2・46〜47）

山田洲生（やまだ　くにお）／一九四〇年東京都文京区で生まれる。区立湯島小、私立開成中学、開成高校、慶応義塾大学経済学部卒
一九六三年石油精製会社に入社、二〇〇二年退社
家族　大江美恵子（義母）、公代（妻）、京子（長女）、唐君波（長女の夫）、寛、真、晃（三人の孫たち）、広子（次女）

人の歩みは主によって確かにされる

山田 公代



夫の洲生さんと

聖書との出会い

私は一九四二年満州で生まれました。兄と弟がいます。終戦後、父の郷里である三重県尾鷲市に移り住みました。両親は「子どもは明るく素直が一番」と言って、私をゆったりおおらかに育ててくれました。母は多忙な生活の中、求めを持って教会に通い始めましたが、そんな母に父は「やるのなら信念を持ってやりなさい」と言ったそうです。母は熱心に教会に通い聖書もよく読んでいましたが、家族を教会に誘うことはしませんでした。父は、自分は無宗教だと称してこの世の神々を拝むこともなく、「亡くなった家族、親しかった方々はここにいる」と言って胸に手を当てるような人でした。ベック兄に初めてお会いしたときも、挨拶早々、先手を打つかのように「僕は無宗教なんです」と言い、ベック兄の「お父さん、それは良かった。僕と同じだね」の言葉になんとも不思議な顔をしていたのを思い出します。

私は子どものころは明るく素直な子と言われていましたが、小さいころから死への恐れが非常に強く、夜には、なにかに追われて逃げ回る夢を見て、不安と恐怖で眠れないことがたびたびありました。尾鷲には八百万（やおよろず）の神々を祭りに拝む土地柄でしたが、私にはそのような神社、お札、お守りの類はなぜか信じられませんでした。ただ、人には隠しおおせても私のすべてを見通せる方が天から見ておられること、そして自分の中には暗い罪があることは知っていました。

日曜学校に兄や弟とともに通い、聖書の話、讃美歌、クリスマスのご降誕劇などが楽しい思い出となっています。後に母が集会に導かれ、尾鷲の自宅に名古屋集会の方々が来てくださって家庭集会が開かれました。また青年の家ではミニキャンプがあり、父も協力的で喜んで参加していました。八十三歳で召されましたが、その前に近くに住む甥に「自分の葬儀はキリストでやってほしい」と言い置いていました。遠方よりベック兄はじめ大勢の兄弟姉妹がお出でくださり、自宅での葬儀となりました。土地柄大変な攻撃もありましたが、主が勝利してくださいました。墓標には父にぴったりだと母が選んだ「吾が国籍は天にあり」と刻んであります。母は今九十八歳になり、東京の自宅近くのケアハウスでお世話になっていて、自分も早く天国に呼んでいただきたい、と主を待ち望んでいます。

まことにわが家は、このように神とともににある。とこしえの契約が私に立てられているからだ。このすべては備えられ、また守られる。まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。（2サムエル 23・5）

集会へ導かれて

結婚後しばらく教会から遠ざかっていましたが、次女広子が五、六歳のころ、突然青い顔で「人が死んだらどこへ行くの？神様は地球だけの神様なのか、宇宙全体の神様なのか、自分だけ死に切れなかったらどうしよう、お母さん死ぬのを待っててね」と不安げに問いかけてきました。そのころ長女京子はすでに自分で探して近くの教会に通い始めていましたので、私もその教会へ広子を連れて行くようになりました。私は日曜日だけ教会に通う文字通りのサンデークリスチャンでしたが、牧師の説教には耳を傾け感動して聞いてました。我が家には大きな問題はないと思っていましたが、一番大切なイエス様が我が家には不在であることに気づいていない盲目の者でした。子供に手がかからなくなって、より充実した

生活をとボランティア、コーラス、料理教室、英会話など始め、虚しさをそのようなことで置き換えていました。私はもともと人への依存心が強く、人に支配され、支配させるという罪、人との係わりを大切にしたいと思うがゆえに犯す罪に気づかず、いろいろな人間関係に、それとは知らず縛られていました。主人はそのような私を見て「物欲はないが、精神的欲張りだ、それも欲張りに入るよ」と言いました。

そんな折の一九九二年五月、同じ教会におられた方に誘われて行ったのが上石神井の家庭集会でした。メッセージの内容はまったく覚えていないのですが、「こんなところがあったの！」と、ただただ感動し喜びに満たされ、涙がとめどなく流れました。次の日曜日からは教会ではなく吉祥寺集会の礼拝へ出席し、礼拝、福音集会を通して「私の探していたものはここにある、これからはここに集う」と決心しました。主は私の罪にも深く細かく光をあててくださり「ごめんなさい」と悔い改める気持ちでいっぱいになりました。聖書の「イエス・キリストの十字架の贖い」とはどういうことかが、初めて心の目にも見えてきたのです。人との係わり方にも光を当て、正してくださいました。聖書についても、それまでの「読まなければならない」の思いが、「読みたい」「知りたい」に変えられて、みことばが心に染み入り、喜びでいっぱいになりました。飾り物に過ぎなかった聖書が、なくてはならない宝物になりました。このとき主イエス様は私を救ってくださったのだ、と確信しています。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

（エペソ　2・8）

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（1コリント　1・21）

わたしは正しい人を招くためではなく、罪びとを招いて、悔い改めさせるために来たのです。

（ルカ　5・32）

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。

（詩篇　119・130）

ずっと以前に母の書棚にあった「実を結ぶ命」の本を読み、大変感動したことを、このころになって思い出しました。中町の祈り会にも導かれ、ともに祈る喜び、祈りの大切さも教えていただきました。長女、次女、母も順次教会から集会に導かれ、このときから主人の救いを祈るようになりました。

主人の救い

主人は真面目で考え深く、用意周到で私や子どもたちの先々のことまで考えてくれました。反面、些細なことでも思い通りにならないと苛（いら）立つことが多く、そういう主人に、私も子どもたちも話したいことが話せない場合が多々ありました。教会に通っていたときにはなにも言わなかったのですが、集会に移ってからは「自分が信仰するのは勝手だが、人には勧めるな」と言い、苛立って食卓をひっくり返すようなこともたびたびありました。私の教会時代の形ばかりの信仰と、喜びあふれる信仰との違いを感じたのでしょうか、主人は心に平安がなく人生のむなしさや不条理を、ときおり大きなため息で表していたようでした。「私のところへ来なさい」と戸をたたき続けておられる主イエス様に、主人の救いをひたすら祈りつづけ、多くの兄弟姉妹にも祈っていただきました。

二〇〇五年、ドイツのキャンプに初めて主人と一緒に参加したときの帰り際のことでした。ベック兄が主人に「洲生（くにお）、人間はいつもなにかに追いかけられていると思っているけど、なにもだれも追いかけていないのにね、もう大丈夫だね」とおっしゃいました。主人は「どうして人の心の中がわかるのかな」と考え込んでいました。

二〇〇七年六月「二人で行こう」と主人に言われ、二度目のドイツキャンプにAB班で参加しました。参加に当たって私は二つのことを祈りました。一つは、主人と私が残された日々を共

にイエス様を信じ、祈って歩んで行けるように主人の心を開いてください、という祈り。もう一つは、この機会に主人がベック兄との交わりに導かれますように、というものでした。日ごろ主人の返答が怖く、なかなか自分の気持ちを話せない私ですので、「ベック兄とお交わりしてほしい」とすなおに話せますように、と祈ったのです。ベック兄がキャンプに出発される直前の学び会で語られたメッセージは「エリシャの生活の終わり」という題でした。メッセージの中で、主のよみがえりの矢（救いの矢）をどうして三回で放つのを止めたのか、主の定められた目的地までどうして前進しないのか、主はそれよりも多くのものをあなたに与える、という部分が、私の心に響いていました。

わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。（詩篇　81・10）

このみことばとメッセージが私の心を強め、主がしっかり道を指し示してくださっていると確信しました。キャンプが終わりに近づき、私はこの機会を逃してはならないとドキドキしながら「ベック兄とお交わりしてほしい」と主人に言うと、一呼吸置いて「いやだね」と、にべもなく答えが返ってきました。いつもならそのまま引き下がってしまう私ですが、もう一度チャンスをくださるよう主にすがる思いで必死に祈りました。主人は日ごろ「自分は集会の“兄弟”などではない、“また従兄弟”のようなものだ」などと言っていましたので、このことをある姉妹に話すと、「従兄弟なんてだめよ。はっきりと“兄弟”にしていただけなければ」と強く話され、「ご主人の顔をうかがわないで主だけを見上げていたらいいのよ、祈っているから」と励まされました。兄弟姉妹の祈りを強く感じました。

そのあと、いつの間にか部屋を出て行った主人はしばらくして戻ってきて、「ベック兄とお話ししてきた」と告げました。祈りは聞き届けられた、と知った瞬間でした。

部屋で二人になったときに、今まで常にあった主人との隔たりがない、さわやかな空気の中におかれ、説明しがたい穏やかさがありました。私は初めて心置きなく聖書のこと、イエス様のことを話すことができました。そして主人は聖餐にもあずかるようになりました。

帰国して三日後、先ほどの「エリシャの生活」のテープを聴きながら荷物の片付けをしていると、おなかが痛み出しました。「あっ、イエス様がされている」と不思議に平安でしたが、痛みは次第に激しく耐えがたくなりました。担ぎ込まれた病院では、手術に至るまでの周囲の動きから、容態は相当悪いことがもうろうとした意識のなかでもわかり、主への恐れも感じました。その後の経緯は省きますが、私の知らないところで、大勢の兄弟姉妹の祈りで支えられました。本当に感謝です。

また、主人はもとより家族一同に心配をかけましたが、このことを通して皆が主の厳しさと哀れみを深く覚えました。主は、私をなにもできない極限の状態に置かれて自我を取り去り、無にしてくださり、主の光の中に置いてくださいました。主のご真実をほめたたえます。

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。（詩篇　37・23〜24）

わたしは彼らの悲しみを喜びに変え、彼らの憂いを慰め、楽しませる。（エレミヤ　31・13）

私は以前と変わらずどうしようもない者ですが、これから残された日々をこのキリスト集会の中で主人とともに主を賛美しつつ歩ませていただきたいと切に願っております。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ　14・6）

山田公代／一九四一年満州国新京で生まれる。三重県尾鷲市立矢浜小、尾鷲中学、県立尾鷲高校、池坊短期大学卒

主イエス様がくださった一方的な恵み

寺田　紀子





若い日の恵み

A聖書との出会い

小さいころ、両親に連れられて教会に行っていました。中学二年の夏、アイルランドの宣教師の方々が数日間にわたって開いた天幕伝道集会に母に伴われて行き、そのまま信仰に導かれました。日曜日の聖餐式、夜の福音伝道集会、火曜、木曜夜の祈り会、学び会などに、ほとんど欠かさず通っていました。高校三年の十月に、多摩川でバプテスマを受け、その後もみことばに多く触れる恵みをいただきました。宣教師の方がよく言われた言葉は、「聖書は人生の大学です」と、「聖書は、あらゆる知恵と知識に満ち、私たちを教育し賢くするために、有益です」でした。

確かに聖書は知恵と知識の宝庫だと思いました。大学への通学の車内では聖書を読みました。最初は、周りの目が気になり恥ずかしさや気兼ねなどありましたが、慣れるとむしろ集中でき、みことばをじっくり味わい楽しむ時間となりました。

老眼鏡がないと聖書の字が見えなくなってきている今、「私たちは、いつか必ず、聖書をとても重く感じたり、読めなくなるような日が来ます。そうなる前に、今からたくさんみことばを心に蓄えましょう！」と言われた伝道師の言葉が、実感として思い出されます。今のうちにみことばに思いを潜め、心に蓄えておきたいと切実に思います。

また、読んでいた本の中に「みことばを、あなたの血液になるまで読みなさい」ということが書かれてありました。みことばに対する観念的な態度を戒められた思いでした。

B静思のとき

大学時代、キリスト者学生会（ＫＧＫ）の夏季学校で「静思のとき」を持つことを勧められ、今に至るまで習慣づけられたのは感謝でした。それは、「朝、部屋のカーテンを開ける前に、誰かに会う前に、まず、主にお会いしましょう。まず主のみことばに、耳を傾けましょう。そして、自分の心を素直に、主に申し上げましょう。主なる神様との交わりを、一日の初めに、少しの時間でも良いから、大切に確保しましょう・・・」というものです。毎朝のみことばを通して与えられる慰めと励ましと喜びは何にも替え難いものになり、また就寝前に一人静かに星が輝く夜空を見上げて祈るひとときは、心満たされる幸いな時間でした。静まってみことばを開くと、朝さっと光が差し込んでくるようにみことばの戸が開いて、美しい広い世界が見えるような感覚があります。この世の思い煩いから急に自由にされて、みことばの世界の楽しさを味わわされるようで、本当に嬉しくなります。

私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。
（詩篇　119・18）

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。
（詩篇　119・130）

主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。

彼に身を避ける者は。（詩篇　34・8）

あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。（詩篇　4・7）

主は私の切なる願いを聞かれた。主は私の祈りを受け入れられる。（詩篇　6・9）

どうか、あなたの光とまことを送り、私を導いてください。あなたの聖なる山、あなたのお住まいに向かってそれらが、私を連れて行きますように。こうして、私は神の祭壇、私の最も喜びとする神のみもとに行き、立琴に合わせて、あなたをほめたたえましょう。（詩篇　43・3～4）

恵みと憐れみ

一九六六年四月に結婚へと導かれ、主人の属していた教会に移り、十一年間を過ごしました。その間に三人の子どもを与えられ、幸せな生活でしたが、いつも心の奥に満たされないものを感じていました。時間に追われる余裕のない生活で、子育ての大事な時期をおろそかにしてしまったことを今になって反省しています。

長男小学五年、長女小学四年、次女五歳のときに、主人の転勤で山形市に移り、福音的な教会に導かれ、霊的にも喜びが与えられて感謝な日々を送ることができました。その後また、主人の転勤で東京に戻りましたが、数年後、ある姉妹が「実を結ぶ命」を貸してくださり、吉祥寺集会のことを話してくださいました。こうして、一九八四年から吉祥寺集会に集うようになりました。初めての礼拝の折、やっと錨を降ろす港に着いたという深い安堵感を覚え、嬉しさと感謝でいっぱいになりました。翌週から毎週集わせていただき、心満たされる日々となりました。

ところが、しばらく経つと、問題が次々と起こされて、主に真剣に祈り求めざるを得ない状況になっていきました。仕

事中心の主人に私はいつも不満で、何かにつけ怒ってばかりいました。お互いに自分を義とし、いさかいはしょっちゅうでした。このころ幼児だった次男は小さな心を痛め、傷つき、結果として成長が歪められてしまったように思います。私は、礼拝、福音集会、祈り会、家庭集会、といろいろな機会にみことばを聞き学んでいながら、相変わらず自我に支配され、自分の努力で良くなろうと頑張っていました。そんな私に、ベック兄は、「委ねてね」と言ってくださいましたが、委ねることは、できませんでした。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（ローマ　7・24）

少し話がそれるのですが、主は、このような中にある者をも用いて主の救いの恵みを届ける機会を与えてくださいました。その幾つかを、お証しさせていただきます。

①十年以上前のことですが、岐阜在住の主人の知人のお姉さんが重病だと聞きました。その時期には主人が広島・山口にメッセンジャーのご奉仕で行っていましたので、岐阜に立ち寄って福音を伝えることができるのではないかと思い、御心ならそのことが可能となりますようにと祈りました。

十二月中旬ごろだったと思いますが、出発を予定していた日は両親の体調が悪く、また急に空が暗くなり雪が降り始め、ゆくてを阻まれた感じでした。しかし、行くべきだという思いが与えられ、両親のことは主にお委ねして出発し、雪の降り続く中をひたすら祈りつつ、東名高速道を走りました。静岡を過ぎたころから雪は止み、空は急に晴れ渡りました。主を恐れるとともに、目に見える状況に左右されてはならないことを教えられました。

名古屋を過ぎたころ、主人は、多忙な知人に会うことはまず無理だろうと言いながらも電話をかけました。私は「イエス様、御心ならお会いできますように」と祈っていました。すると、「今帰宅したところです。一時間後ぐらいなら会えます。こんなことは、滅多にないのです」という返事でした。思わず

主を讃美しました。このようにして岐阜の駅で落ち合いました。それから、彼の姉がガンであること、複雑な家庭の事情からほとんど付き合っていないこと、自身が悩んでいることなどを聞き、祈らずにいられない状況を知らされました。そのとき、ベック兄の「ごめんなさい。ありがとう」の勧めを思い出し、自分でもびっくりするほど何の抵抗もなく、伝えることができました。その方は、「そうか～、ごめんなさいか…。ありがとうなんですね～…」と言って妙に納得していました。そして、用意していったベック兄のメッセージテープ、『実を結ぶ命』、『光よあれ』数冊も快く受け取ってくださいました。

その後、手紙がきて「あれから、しばらくして、姉のところに行って、『長いこと姉さんを赦せず、何も助けられないでごめんなさい。こんな自分のことを心配してくれていてありがとう』と言えました。姉は、とても喜んでくれて、今までのわだかまりが取れました」と書かれていました。お姉さまは柏のガンセンターに入院中とのことで、ベック兄に見舞っていただくこともできました。

ベック兄は、ベッドの横に跪き、彼女と同じ目線でお話しくださり、祈ってくださいました。そして、「**女が自分の乳飲み子を忘れようか。…たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない**」(**イザヤ 49・15**)というみことばを、寝ている彼女から良く見えるところに貼ってくださいました。

しばらくして亡くなられたとのことでしたが、彼からの手紙には、「激しい気性で苦しみも多く、厳しい表情の姉でしたが、あれから変わり、最後は本当に安らかな、優しい美しい顔でした」とありました。

主は、中途半端な信仰の私たちさえも用いて、苦しむ一人の魂を主の御許に引き上げてくださいました。当の彼はその後、岐阜の家庭集会にお誘いした時に近くまで来られたのですが、ご多忙のようで集会には出られませんでした。今は、祈りに覚えています。

②二つ目は、やはり十年ほど前、叔父の石岡鼎司（当時八十歳位）を見舞ったことです。盛岡での集会後、N兄も一緒に見舞って、話してくださいました。お祈りしましょうと言ってくても霊が聞いているからね、これを読んで上げたら良いよ」と言って、『基本的なみことば』と『ごめんなさい、ありがとうの祈り』をくださいました。主から大切なものをお預かりしたような気持で、兄のところで、『ごめんなさい、ありがとうの祈り』を読んで、祈りました。そして、「イエス様は、私たちのわがままをみんな背負って、代わって罰を受けてくださったから、『ごめんなさい。ありがとう』と言ったら、もう罰せられないよ。そして、天国に行けるよ。ありがたいね～」と言いました。すると、以前はイエス様のことや聖書の話にまったく取り合わなかった兄が、今はもう私たちのことすら分からなくなってしまっていたにもかかわらず、「アーメン」、「アーメン」、「アーメン」と大きな声で三回も言ったのです。私たちは大きな喜びに満たされました。この後、盛岡キャンプの折にベック兄が見舞ってくださった後、しばらくして召されました。心から感謝しています。

④そして、義兄のことです。

私のすぐ上の姉の夫は八十三歳のとき脳梗塞で倒れ、荻窪

て、祈ってくださったところ、叔父は「ありがとう！」を三回もはっきりと言ったのです。私たちは、驚きと喜びの内に、叔父は救われたと確信できました。主の備えと恵みを心から感謝しました。その後も、主人がご奉仕の時に叔父の家に立ち寄り、盛岡集会に何度か共に集いました。ある日の盛岡集会で、叔父は、「こんな所に来て、何か儲かることがあるのか」と言いました。私は「あるある。使えば無くなるお金ではなく、死んでも死なない永遠の命が儲かるよ」と答えたら、「ふーん、そうか」と言って、開かれた聖書の個所を真剣な顔で読んでいたことが思い出されます。その後も、盛岡集会の姉妹方が、幾度となく家まで行って集会に連れて行ってくださり、また祈ってくださっていました。叔父は天国にいると確信でき、感謝しています。

③三つ目は、長兄石岡敬のことです。

四～五年前、兄が脳梗塞で倒れたと聞き、仙台キャンプの帰りに見舞いました。このときは、主人と長女と三人でした。ベック兄に兄の状況をお話ししたら、「本人は何も分からな

の病院に入院しました。二度目の見舞いのとき、義兄の手をとりみことばを読みました。イエス様のお話をして、「お祈りするね」というと、何も分からないはずの義兄は静かに両手を持ち上げ、胸の上で祈るために手を組みました。考えられなかったことで、イエス様に感謝して祈りました。祈り終わって義兄の顔を見ると、なんと両眼から涙がすーっと流れていました。ああ、イエス様にごめんなさいができたんだ、ありがとうができたんだ、と胸がいっぱいになりました。主の憐れみにただ感謝するばかりです。

話をもとに戻しますと、私と主人との間には長いこと葛藤があり、悶々と悩む年月がありました。当時、愚かな私は、そんな思いを子どもにぶつけていたように思います。

現在、長男はまだ主のもとに来ようとはしませんし、長女は十三年別居の末、離婚に至り、心の病と離婚等の苦痛で傷んでいます。次女も、吉祥寺集会で洗礼を受け、結婚式もさせていただきましたが、主から離れています。次男は、小学生のときのいじめの経験がもとで、高校生になってから不登校になり、今は学ぶことも働くことも、もう遅すぎると言って否定しています。

私は、このような家族を上から見て、裁いていましたが、様々なことを通して、自分がいかに愚かで、わがままで、身勝手で、愛のない者か、また不信仰で不従順であるかを示されました。「改めるべきはあなたです」と主から指摘されました。振り返ってみると、私自身、親を敬うよりも批判する者でしたし、老いた親の介護にあたっても、愛のない者であったことを思わされています。主人に対しても、みことばの示す秩序から逸脱している者でした。信仰においては、知識だけの律法学者のような者であり、形式ばかり重んじるパリサイ人のような者であり、自己義認の傲慢な者でした。そして、いまだにそうだと知らせられました。

親として、子供たちから強く責められることを通して、自分の本質が罪のかたまりであり、罪しか犯せない者、治しようのない、滅びるしかない者だという事実を知るに至りました。思えば、主人や子どもたちは、こんな私をずっと忍耐し、助けてきてくれていたのでした。本当に申し訳なく思いました。ただ、ごめんなさいと言うしかありません。

私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。

（ルカ　15・21）

わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。

（ルカ　5・32）

このような悩み苦しみを通して、主イエス様が人となって来てくださり、私のために身代りになって神の裁きを受けてくださった、という事実を知ることができました。イエス様が再び来られる時、ご自身の十字架の血によって、こんな私をも罪のない者としてくださり、永遠の命にあずからせて天の御国に入れてくださるということは、考えられない大きな恵みです。

救いの恵みは、それまでもよく解っていたつもりでしたが、心から信じ受け取ることができました。私は以前は、自らの間違いや罪を指摘されるたびに、怒ったり、言い訳をしたりしましたが、今は、「はい。主よ、その通りです。こんな者のために身代りになって、十字架についてくだってありがとうございます」と言えるようになり、救いの恵みを素直に感謝できるようにしてくださいました。このように、自分にとって避けたいような様々な現実を通して平安と自由の中に安らぐことができるようにされました。すべてのことを主に委ねて待つことが、どんなに平安で幸いであるか、ベック兄が「委ねてね」と言われた意味がようやく解ってきました。

窮地に追い込まれたときも、家庭の中で嵐の吹きすさぶときも、恐れたり、心配したり、苛立ったり、怒ったりしなくてもよくなりました。「主よ、ごめんなさい。憐れんでください」と祈り委ねると、主は鎮めてくださり、平安の内にことを進めてくださることを幾度となく体験させていただきました。主は、ご自身に信頼して依り頼む者を見捨てず、恥を見させることなく、みことばの約束通りに護り導いてくださ

るお方である、と知ることができました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇 119・71）

振り返えれば、たくさんのご兄姉方が私たち家族のことを祈ってくださり、主は折に適った助けや恵みをいつも備えてくださいました。長女も悩み苦しみを主の御手からいただけるようになってきていることは本当に感謝です。次男についても、ことあるごとに多くのご兄姉方が祈ってくださり、そのつど考えられないような恵みをいただきました。主の憐れみに心から感謝しています。

まだ、我が家にはいろいろ問題もあり、どうしたらよいのか判断に迷い悩むことも多くあります。主の御心に従って行けますように、そして、まだ救いにあずかっていない子どもたち、また多くの親族が主のご再臨の前に間に合って救われるよう、主のお約束を信じて、委ね祈り続けていきたいと願っています。そして日々、心の眼を開いてくださいますように、新しいいのちにあって成長させてくださいますように、と心から祈り願っています。一日の終わりには、「イエス様、ごめんなさい。こんな罪人の私を憐れんでください」、「あなた様の十字架で流された贖いの血潮だけが、私の拠り所です。本当にもったいなく、ありがとうございます」、「これからのこと、よろしくお願い申し上げます」と祈る日々です。

寺田紀子／一九四〇年、岩手県盛岡市に生まれる。一九四二年、二歳半のとき青梅に移る。一九四五年、五歳のとき東京都府中市に転居。府中市立第一小、第一中、都立立川高校、共立女子大家政学部卒。

一九六三～一九七七年、都立農業高校の教諭を務め、一九六六年に結婚、夫の転勤により退職、山形に転居し四年在住の後、東京に戻り現在に至る。

家族は、夫正義、長男剛、長女淳子、次女千恵、次男光史。

主は選び召してくださいました

黒田 禮吉



御代田ロングキャンプで、ご夫婦いっしょに

それゆえ、人はその父と母を離れて、ふたりの者が一心同体になるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。（マルコ 10・7～8）

結婚して二人が一心同体になるとの聖書のみことばに、長い間、私は従えない者でありました。夫婦という以前に、私は私であり、妻といえども踏み込んでほしくない領域が当然ある、という考えを持っていました。

聖書のみことばが妻を通して我が家に入ってきた時、信仰は自由だが私には関係ないと考えていました。自分は十分に家庭的であり、父親として夫として合格点にあると思い込んでいました。しかし、今振り返って見ると、何と身勝手に自分の城に閉じこもっていたのかと思わされます。そのような私の態度が、時として妻を孤独にさせ悲しい思いにさせたことに気付きませんでした。妻が救われた時、私にはやれやれという気持ちがありました。これで妻の愚痴や様々な制約から解放される、と考えたからです。

私は昭和二十年に名古屋で生まれました。戦後の焼け野原にできた小さな、しかし、真新しい教会幼稚園に通い、小学校時代も日曜学校に集っていました。幼い信仰でしたが、イエス様を信じていました。ところが、中学に入った頃から、我が家は父が熱心に信奉するモラロジー（道徳科学）によって変えられました。毎朝、家族全員が仏壇に手を合わせ「ご祖先拝礼の言葉」を読むようになりました。また、父の意向で私たち四人の兄弟姉妹は全員が千葉県にあるモラロジー団体による全寮制の高等学校で教育、訓練を受けました。三年間の寮生活は私の心身を鍛えるのに役立ちました。そして、モラロジーが説くように、一人一人が自分中心の考え方を止めて、道徳心を高めていくことで、より良い人間社会を作り上げることになると当時は思っていました。しかし、大学生になり様々な思想、考えを学ぶにつれ、次第にモラロジー以外の価値観、中でも、自分が好きであった自然科学の世界こそ純粋で正しいものであると思うようになりました。その頃には、キリスト教もモラロジーも卒業した、と自分で思うようになっていました。

妻が導かれてから、私も彼女に付き合って、近所で開かれる家庭集会や、吉祥寺の集会にしばしば出席するようになりました。妻はその頃から私の救いを祈るようになったのではないかと思います。けれども当時の私には、求める気持ちが全くありませんでした。妻には救いが必要であるが、私には救いは必要ない、だから、自分でも救われ得ないとの自信がありました。しかし、自分の経験から、子どもたちには日曜学校は必要だと感じ、吉祥寺まで連れて行く役割を引き受けていました。私は人が右を向けば左を向くといったひねくれた性格を持っていました。素直にみことばに聴くとか兄弟姉妹の勧めに従うことができませんでした。まして妻の説得や勧めには我慢ができませんでした。そのような私が救われたのは主の憐れみであります。

しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。

（1コリント　1・27）

妻がこのような偏屈な私を持てあまし、信仰的に本当に落ち込んでしまった小さな出来事がありました。どうしようもなく弱められ絶望に落ち込んだ惨めな彼女を見て、私は信仰の厳しさを垣間見た思いがしました。また、泣き崩れている、弱いはずの妻が逆にとても強く感じられました。そして、そのような本物で純粋な信仰ならば、私も是非とも欲しいと、初めて求める思いが与えられました。後で気がついたことですが、惨めで憐れだったのは私の方であったのです。不思議なことですが、落ち込んでいる妻を慰める思いで、「一緒に祈ろう」と思わず声をかけていました。

妻がどのように祈ったかは覚えていませんが、私はその時、次のような祈りをしていました。「イエス様。私は自然の営みを通して人知を超えた大いなるものの存在を信じる者ですが、未だあなたを知りません。しかし、これまでの信じないための努力をやめ、今からあなたを信じる者として歩みたいと願っています。どうぞ、あなたを知ることができるように働いてください」

主はその祈りに直ぐに答えてくださいました。今まで全く受け付けなかった聖書のみことばが体にしみ込んでいくような経験をしました。今から二十七年前のことでした。

救われた当初、私たちは埼玉県の浦和に住んでいましたが、家族に喜びが与えられ、近所にも多くの兄弟姉妹が備えられました。けれども、私自身は特別な試練や痛みを通して救われたわけではありませんでしたから、甘い悔い改めでありました。

そして、数年してから、とんでもない事件が起こりました。私たちを導いてくださった四人の兄弟姉妹が御代田の福音センター建設に反対し、集会のやり方についていけないと集会を出たのです。そのうえ、私たちも集会を出たことにされていました。大変なショックを受けました。何が正しくて何が正しくないのか、そして、どうしたらよいか全くわかりませんでした。

その頃、私たちは四人目の子どもが与えられました。そして住まいが手狭となり、もう少し広い、駅から近い住まいを捜すこととなり、今の新座の住居が与えられました。こうして主の導きによって、影響力のあった兄弟姉妹から引き離さ

れ、結果として、私たちは守られました。当時の近所の兄弟姉妹のほとんどが集会を離れ、それぞれ散り散りにされてしまいました。

ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。これらのことを行なっていれば、つまずくことなど決してありません。

（2ペテロ　1・10）

私はかろうじて吉祥寺集会につながることが許されましたが、御代田やドイツのキャンプに嬉々として参加する兄弟姉妹を横目で見ながら、喜べない者になっていました。御代田のセンターに私は反対していたわけではないけれども、素直に喜べない自分がいました。また会社の出張で海外へ行く機会がありましたから、自腹でドイツまで行く気持ちはなく、第一に休暇もとれないと考えていました。ウイークディは仕事中心、日曜日にかろうじて集会に出るといった状況が長く続きました。そのような自分だけの信仰でしたから、家族や親族にイエス様を紹介することにも抵抗を感じていました。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

（詩篇　133・1〜3）

しかし、このように喜びを忘れた私にも主が働いてくださいました。今から十四年前になりますが、ある兄弟姉妹から、旭川、札幌にメッセージに行くので一緒に行きませんかとのお誘いを受けました。どうしてそんな所まで一緒に行かなければならないのかと、最初のお誘いは丁重に断りましたが、三ヶ月後もう一度お誘いを受け、断り切れずご一緒させていただき、豊かなひと時が与えられました。

また、その年の十月に私にとっては初めてとなる海外キャンプ（スイス）に参加することができました。当時の私は社内リストラに遭って、管理職からはずされ、それまで触れたことのないパソコンをあてがわれて馴れない仕事をしていました。その代わり定時に帰ることができるようになり、年次休暇も全てとることができるようになりました。仕事は面白いものではありませんでしたが、集会の兄弟姉妹との交わりを通して、次第に信仰の喜びが与えられるようになりました。全てが主の導きでありました。

看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。そして、ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。

（使徒　16・29〜31）

四人与えられた子どものうち娘二人は、それぞれの問題を通してイエス様を信じ、喜ぶ者に変えられました。そして下の娘は二〇一一年、主にある兄弟との結婚へと導かれました。一番下の息子は今は自分のわがままを優先して、なかなか集会にも集わなくなっていますが、受洗の恵みをすでにいただいています。

しかし、長男はずーっと私たちの悩みの種でありました。私たちは若さに任せて、いろいろと教育的に良いと思われる場所へ彼を連れ出しました。集会に導かれてからは、私たちの信仰がつまずきとなっているのか、まだ主を信じる者へと変えられていません。そんな長男が三年ほど同棲した相手との結婚に導かれ、あり得ないことでしたが、五年前に御代田で結婚式を挙げさせていただきました。同棲関係を認めることはできない、ともちろん私は二人に言いましたが、振り返ってみると、時にあいまいな態度をとり、必ずしも断固とした態度を貫くことができませんでした。信じる者でありながら、その時々の自分の感情や考えに支配され、二人に時に迎合す

るような者でありました。

長男の結婚式の後、一年ほどは本当に主の祝福と恵みを受け、統合失調症である彼女の薬の量も減り、このまま導かれたら良いと思っていました。何回か集会や交わりの場に誘いましたが、結局二人は勝手に離婚してしまい、イエス様のみもとに来ることはありませんでした。

離婚直後、長男はメールでこんなことを書いてきました。「相談しても、いつも答えはわかっている。『祈ること』、そして『聖書の言葉』しかない、だから『誰にも頼らず、相談しない』」。それが長男の出した答えでした。

イエスはその子の父親に尋ねられた。「この子がこんになってから、どのくらいになりますか。」父親は言った。「幼い時からです。この霊は、彼を滅ぼそうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。ただ、もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください。」するとイエスは言われた。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」するとすぐに、その子の父は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」

（マルコ　9・21〜24）

私はこの父親のように砕かれようとしない、自分を守る者でありました。悲しい現実ですが、今私たちは何もできない状態にあります。しかし、みことばは、私たちに「信じる者には、どんなことでもできるのです」と語っています。私たちが何かをするよりも、主が何をなされるかを今は忍耐して、期待を持って祈りながら待ち続けています。二人がイエス様のところに立ち返って荷を下すことができれば本当に幸いです。

夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

（1ペテロ　3・7）

妻を「いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい」というみことばがあることを数年前に知り、本当にびっくりしました。振り返ってみれば、私にまことの信仰が与えられるきっかけは妻が導かれたことであり、妻の祈りの結果です。私は直接妻に感謝することの極めて少ない者でありますが、今は妻を主にある姉妹として尊敬できるようにと願っています。

私たちは今二人だけの生活となりました。妻の母が健在でその介護のために、妻が出かける場合とか、それぞれの祈り会に出席するとき以外は、二人で過ごすことが多い日々です。考え方、感じ方が全く異なる二人が、衝突を繰り返しながらも日々守られていることは、主の恵みであり、憐れみです。

五年前から続けている家族の祈り会も、今は二人だけになりましたが、この祈り会を通して私たちは守られ、主にある一致が保たれています。本当に感謝であり、恵みであります。祈り会を通して、やっと私たち夫婦は「一心同体」になることができます。

イエス様の「みからだなる教会」の基本単位は家庭です。私たちも「みからだなる教会」を構成する一員として、主が来られるその日までイエス様を喜んで証しする者として歩みたいと願っています。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

（1コリント　6・19〜20）

黒田禮吉／一九四五年二月　名古屋生まれ
名古屋市立名城小学校、市立前津中学校、
千葉県　麗澤高等学校、名古屋大学理学部化学科卒
万有製薬株式会社（現ＭＳＤ株式会社）勤務　同社定年退職
妻：由紀子　長男：直樹　長女：麻美子　次女：福井三恵
次男：新

8人の証し　Unser HERR lebt

主は、真理を知ることを望んでおられます

黒田　由紀子



中央、由紀子さん。ご家族にかこまれて

あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。（1ペテロ　2・10）

それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。（1ペテロ　2・9）

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。（1テモテ　2・4～5）

この世にあって望みもなく神もなく暗闇の中にいた私を光のなかに入れてくださり、生きる望みを与えてくださった方は、イエス・キリストです。

救い主であられるイエス様のことを初めて耳にしましたのは、今から三十年ほど前、三十四歳の時でした。当時住んでおりました家の近くで開かれたドイツケーキの会に、ある方からお誘いを受けました。その方とは生協活動で不思議な出会いがあり、何か筋の通った言動には心ひかれるものがありました。ケーキの会はドイツ婦人による講習会で、とても新鮮で感動しました。その席にご主人様のベックさんがおられて、流暢な日本語で、人は何のために生きるのか、真理とは何なのか、と心の奥底を揺り動かすようなお話を真剣なまなざしで語られたのです。この方は本当のことを話されていると思いました。それまでそのような話を聞いたことがありませんでした。

それからというもの、趣味や、安心安全を求めて熱心にやっていた生協活動などが急に色あせ、私の関心は一挙に聖書に向かい、何もかも放り出して、学び会、家庭集会、祈り会へと集うようになりました。

天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。すばらしい値うちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。（マタイ　13・44～46）

私は昭和二十二年に浅草で生まれました。父が大学病院の勤務医でしたので、長屋住まいの貧乏暮らし、父親はほとんど不在、母一人で三人の娘たちを苦労して育ててくれました。隣は歌舞伎の舞台背景を描くおじさん、裏は、べっ甲の櫛細工の職人、前の家は刀のつばの細工職人というような界隈で、たくさんの子どもたちと一日中遊び、貧しいながらも楽しい、楽しい小学生時代でした。

中学生の時、父の転勤で石川県金沢へ引っ越しました。何もかも別世界でした。気候風土もさることながら、言葉の壁も厚く、信頼できる友達もできないでいました。両親は慣れ

ない生活で顔を合わせれば言い争っており、私は自分の殻にどんどん閉じこもり、何のために生きているのかと悶々と悩みながらも、自分のことしか考えない者になっていました。そして親の苦労も考えず、ただ外の世界に飛び出したい一心で、大学、就職、結婚と、「自分の欲の中に生き、肉と心の望むまま」突っ走っていきました。自分の思いどおりに行動しているはずなのに、心は満たされず、いつも孤独で苦しい日々でした。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。

（エペソ　2・1～5）

集会に集い始めたある日、ベックさんのお家でお交わりをいただきました。お話をうかがっているうちに、もう二度とこれまでのような虚（むな）しい苦しい生き方はしたくない、神様を無視して生きてきたことが罪ならば私は罪人です、お赦しください、これからは神様と一緒の人生を歩みたいですから導いてください、と心の底から思わされ、ベックさんの後について初めてイエス様にお祈りいたしました。涙が後から後からあふれ出ました。

あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

（1ペテロ　2・25）

それから、イエス様はどのようなお方なのだろう、と信仰書を読みあさりました。ウォッチマン・ニー、アンドリュー・マーレー、ジョージ・ミュラーと読むうちに頭の知識ばかり増え、傲（ごう）慢にもわかったような気がして、人を裁くようにさえなっていました。

そのようなある時、幼子のように祈る姉妹との出会いを通し、私はイエス様のことを何も知らないことを教えていただきました。それまで歯が立たないと避けていた分厚い聖書を意識して開いた時、そこにイエス様がおられ、「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と語りかけてくださいました。イエス様が十字架につかれた意味も、永遠の命のことも、自分とどう関わりがあるのかわかりませんでしたが、イエス様が私のことをすべてご存じで、愛してくださっているとただ信じました。

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いをはるかから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません。

（詩篇　139・1～6）

こうして救っていただいてまもなく、三番目、四番目の子どもが与えられました。かつては妊娠も、出産も、子育ても自分の考えや力でするものと思い込んでいました。しかし主は、子どもの命はイエス様が与えてくださり、イエス様が育ててくださると教えてくださいました。上の二人の子たちはそれほど問題もなく大きくなりましたが、下の二人は赤ちゃんの時から様々な病気が与えられ、何度も救急車のお世話になったり、入院したりで、決して楽な子育てではありませんでした。それでも、いつも、いつもイエス様にお祈りし、助

8 人の証し　Unser HERR lebt

けていただきました。数々の大山小山を乗り越えさせていただきました。

母親としても妻としても、愚かでどうしようもない、他人をつまずかせるだけの者でしたのに、主人をも救ってくださり、次なる試練に備えてくださいました。

この頃集っていた浦和の集会は、ご近所の方がたくさん導かれ、祝福された集会でした。しかし、御代田の福音センターの建設が始まった頃から、家庭集会に来る人が減り、導いてくださった姉妹も突然祈り会に来られなくなり、喜びがどんどん失われていきました。

そんなある日、センター建設を批判されていた兄弟姉妹が、吉祥寺集会を出ると宣言をされたのです。私たち夫婦は寝耳に水で、何が起きたかわかりませんでした。集っていた兄弟姉妹たちも散り散りになり、浦和の集会はあっという間に崩壊してしまいました。残されたのはひと組のご兄姉と私たちだけでした。人間不信、不安や恐れで、どうしたら良いかわからず、しばらく吉祥寺にも行けませんでした。

折しも我が家は六人家族になり、手狭になった浦和の家から新座に引っ越し、一年くらいは主人と二人だけの礼拝をしておりました。人々から引き離されて初めて、祈り合って交わる姉妹たちのいないことがどんなに苦しいことかを思い知らされました。どうか近くに祈り合う姉妹をお与えくださいと必死で祈りました。なんとその翌日、自転車で五分の所に住んでおられた姉妹から、祈り会をこれから始めますが、いらっしゃいませんかとの電話が入りました。こうして主は、私の叫びを聞いてくださり、新座の祈り会と共に、新しい一歩を踏み出すことができました。

今日に至るまでの二十年の間、三〜四人で始まったこの祈り会に、あちこちから姉妹たちが集められ、バンコク、広島、上海、新潟など各地の祈りの課題も共に分かち合い、共に主を見上げて、祈り合い、主を賛美し、主を喜ぶことができました。これも、ただただ主のお恵みでした。また救いを受けてからの三十年の間、主は、私の心の内側を照らしてくださいました。次々とわいてくる悪い思い、自尊心、たかぶり、ねたみ、さげすみ、無関心、むさぼりなどは、自分では抑えることも、消し去ることもできないことを教えてくださいました。人を愛することも、みことばに従うことも、自分ではできません。金太郎飴のように、どこを切っても自分の中には何も良いところがない者なのに、主は愛してくださり、私の代わりに十字架についてくださって、罪赦された者としてくださったのです。自分が持っていると思っていた信仰でさえ、持ち合わせていないことを思い知らされ、ただただイエス様のおとりなしに支えられていることを感謝する毎日です。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。（1ペテロ　2・22〜24）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ　2・20）

このようにどうしようもない者ですが、この私の内にイエス様が御霊として住んでくださっているという主のみことばが嬉しく、感謝でいっぱいです。

また主は家族の救いもお約束してくださっていますので感謝です。素直にイエス様を信じていた子どもたちも、成長とともに自我も成長し、主から離れ、自分勝手な道へとさまよい始めました。あれこれ説得すればするほど親に反発し、聞く耳を持たなくなりました。どうすることもできず、夫婦で祈る日々でした。

そんな中、長女と次女は、高校生になった頃、それぞれの苦しい状況の中で悔い改めに導かれ、イエス様を主と仰ぎ見る者へと変えられました。長男と次男は、いまだ自分の力に頼り、主に背を向けて苦しい我が道を歩んでおります。主はすべてをご存じで、忍耐をもって導いてくださいますから、感謝しつつ、一日も早く主の元に帰るのを待っております。

最後に、九十六歳で召された父のことをお話ししたいと思います。私は、父に聖書やイエス様の話を何度もしたのですが、父は、じっと聞いた末に、決まって、「信じられん」と言っておりました。ある時、「天国に行きたかったら、一緒にお祈りして、そうだと思ったらアーメンと言ってね」と話した後、イエス様の十字架の贖いに感謝のお祈りをしましたら、「アーメン」と言いました。「苦労かけたお母さんに、ごめんなさいと言ってね」と話した時も、「ごめん」と言いました。ただ母は、この父の謝罪も聖書の話も、全く聞こうとしませんでした。

その後、老人施設に入所した父のところにベック兄が来てくださり、お交わりとお祈りをしてくださいました。期待した信仰告白はありませんでしたが、とても嬉しそうでした。そんな父が、一昨年暮れに急性肺炎で入院、三日後に眠るように召されました。召される当日、ちょっと息が苦しそうな父に、イエス様が一緒だからねと私が呼びかけると、「誰が？」と酸素マスクをしながら聞きましたので、神様だよと答えると、「そうか」と言いました。それが最後の言葉でした。その後、次女が見舞い、眠っている父の耳元で賛美し、お祈りしました。私が夜中に駆け付けた時には、もう召されていましたが、父の顔は、最晩年のおどおどした顔から、何とも言えない静かな威厳と平安に満ちた顔に変えられていました。

年末で、葬式はできませんでしたが、母の意向で火葬だけをすることになりました。納棺の時に、主人がイエス様に感謝のお祈りをしましたところ、驚いたことに、母が、そのお祈りが良かったから火葬の時の進行役をやって欲しいと主人に頼みました。当日は大晦日で、仕事も皆休みで、妹達の家族全員、私の家族全員、父のいとこ、父の弟の孫、そしてもう一人の父の弟である福代雄三兄姉の全家族が集いました。母の意向に従い無宗教で行われ、父の棺に献花し、日々の歌216番を賛美して父を送り出し、最後に親族の前でイエス様に感謝のお祈りもすることができました。簡単でしたが、主にある父のお別れ会ができたことは、ただただイエス様のお恵みであり、家族の救いのお約束は真実であり確かであることを思わされました。また納骨の日は、あの大震災の二日後でしたが、茨城におりました妹たち夫婦と福代雄三兄姉も集められ、お寺とは関係したくないからと母が購入した墓に、無事に納められ、その墓石には、「憩い」という文字と、戒名もない父の名前だけが彫られておりますのも本当に不思議なお導きでした。

これからもまだ救いを受けていない家族や友人、知人の方々が、永遠のいのちをいただける日を、主が来られる日を、待ち望んで祈っていきたいと願っています。

8人の証し　Unser HERR lebt

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」（ヨハネ　11・25〜26）

黒田由紀子／一九四七年十一月　東京都生まれ
台東区立柳北小学校、金沢大学付属中学校、石川県立泉が丘高等学校、
津田塾大学英文学部卒
夫：禮吉、二男二女

あとでわかるようになります

久田 博



左から2番目、博さん。ご家族と

「神なき人生」とは、一体どんなものでしょうか。

「神なき人生」、それは神様を無視して自分の力で歩む人生です。そしてその結果として受ける重荷、苦しみ、不安に耐えながら、一時的な楽しみで気を紛らわせ、本当の喜びも希望もなく生きる人生ではないでしょうか。

これとは反対に「神とともに歩む人生」は、重荷や悩みを決して一人で抱える必要はありません。主イエス様が「わたしのところで、その重荷を下ろしなさい」と言って、共に歩んでくださるのです。たとえ嵐が吹いても恐れることはなく、苦しみの中にあってもこの世で味わうことのできない神の平安が与えられ、喜びと希望を持って日々を生きることができるのです。救われた兄弟姉妹は、どなたでもあのダビデのように言うことができるのではないでしょうか。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。・・・私の杯は、あふれています。

（詩篇23・4、5）

私は人生の折り返し点と言える年齢まで「神なき人生」を歩んでいましたが、主の憐れみにより「神とともに歩む人生」へと変えられました。惨めな日々を送っていた者に主がどんなに大きなことをしてくださり、どんなに憐れんでくださったかを証したいと思います。

1 主は罪人を招くために来られた

特別の苦しみもなく普通の人生を歩んでいた私でしたが、二十数年前の四十二歳の時に大きな試練が与えられました。都市銀行に勤めていて仕事の悩みから「うつ病」になったのです。今なら大抵の人が知っているこの病気も当時はあまり知られておらず、私も家内も全く知りませんでした。症状はどんどん悪化し、やせ細っていきました。目覚めている時はとめどない不安と焦り、このまま治らないかもしれないという恐れ、ふがいない姿の自分を責める気持とが、繰り返し交互に襲ってきました。いつも鬱々（うつうつ）としてすべてがマイナス思考になり、まるで地獄にいるかのようでした。唯一、睡眠薬で眠る時だけが私にとって幸せな時間でした。

「このまま永遠に目が覚めないで欲しい」と本気で願ったものです。自分のことしか頭になく、この苦しみから一日も早く脱出したいと、いつも考えていました。まさに究極の自己中心の姿だったと思います。

そんな絶望的状態の中、わらをもつかむ思いで吉祥寺キリスト集会へと導かれました。一九八七年のことです。初めて触れたキリスト集会の雰囲気を、今も決して忘れません。そこは私がこれまでに全く経験したことのない別世界でした。初めて開く聖書のみことばは、私の渇き切った心の中にしみわたりました。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

（ヘブル 13・5）

女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしは

あなたを忘れない。　（イザヤ　49・15）

あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。…わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。　（イザヤ　43・2、4）

衰え果てた私の魂は揺さぶられました。何か分からないけれども不思議な力で守られている、と強く感じ、涙が溢れたことを覚えています。しかし、その涙には自分が守られている「安心感」と、なぜ自分はこんな目に遭ったのかという「悔しさ」とが入り混じっていました。

その後、ベック兄との個人的な交わりや、さまざまな家庭集会での兄弟姉妹との交わりによって大いに慰められ、励まされました。たとえ落ち込んだ時でも主がいつも共にいてくださることをみことばから知ることができ、計り知れない慰めが与えられました。

平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。　（詩篇　4・8）

当時の私は、布団の中でベック兄のメッセージをイヤホーンで聞きながら眠ることが日課になっていました。そうするとこのみことばの通りの平安が与えられて、あっという間に眠りにつくことができたのです。こうして段々と睡眠薬はいらなくなっていきました。勿論、メッセージの続きは、次の日に最後までしっかりと聞かせていただきましたが。

このようにして一九八八年五月に家内と二人で受洗の恵みに預かり、一年余り休職した後に、以前とは別の部署に復帰することができました。

しかし、そのうちにまた新しい問題が起こりました。それは、集会に集っても喜びが無くなってしまったのです。聖書のみことばがかつてのように心に響かず、涙も出なくなりましたが、何故そうなったのか、さっぱり分かりませんでした。けれども実は心から喜べない決定的な原因があったのです。それは私に「罪の意識」が欠如していたことです。

勿論、私は「罪」とは人間が神様に背いて生きること、イエス様が十字架上で流された血潮によって人間の背きの罪が完全に贖われたこと、イエス様の蘇りを通して信じる者に永遠のいのちが与えられること、は知っていました。しかし、イエス様の流された血潮が「ほかならぬ私の罪のためであった」という最も大切な事実認識が欠落していたのです。

なぜ私が自分に罪は無いと思っていたかと言えば、それは「被害者意識」のせいでした。私は、自分がうつ病になった原因は上司から命じられた無理難題の仕事を断われなかったせいだ、と思っていたのです。自分が被害者だと思っている者に罪人の自覚があるはずはなく、従って、十字架も血潮の意味も分かるはずもないのです。だから悔い改めも、罪赦された喜びも、主に感謝する気持も沸いてこないのは至極当然のことでした。これこそが初めの喜びも消えて、ただ集会に集うだけの惨めな状態に陥った原因だったのです。

しかし、受洗から一年ほどたった頃、あるメッセージを通して私は自分がどうしようもない罪人であることをはっきりと示されました。それまでの私は何の根拠も裏づけもなくプライドを持ち、他人の評価を気にし、人前で恥をかくことを嫌う者でした。しかし、この性質こそ主が最も忌み嫌われる高慢であり、「罪」そのものであると気づかされたのです。

振り返れば、無理難題と思える仕事を命じられた時も、この性質の故にノーと言えずに悩み続けた結果、病気になったのです。

人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。　（箴言　29・25）

このみことばの通り、人を恐れる本当に愚かな捕われ人だったと思います。そして、その愚かさから来るつけは、家族を悲しませ、特に家内には堪え難いほど辛い目に会わせてしまったのです。

思えば、冬の寒空の中「お父さんが眠れないから」と、騒ぐ子どもたちを家から連れ出して何時間も外出したことがありました。また、ある時は、極端に落ち込んだ様子で出勤する私を見て心配し、バスの定期入れに幼い息子たちの写真を忍ばせたこともありました。また、これは随分後で家内から聞いた話ですが、「病気の夫と幼い子どもたちを抱え、弱気を起こしたらおしまいだ。せめて私だけはしっかりして絶対に泣くまい」と誓ったそうです。しかし、その家内がたった一度だけ泣きました。それは下の息子が転んで額（ひたい）を青黒く腫らした時です。「どうしてこんな辛いことばかり起きるのかしら」と泣かれた時、掛ける言葉も見当たらず、ただ自分のふがいなさを責めるしかありませんでした。本当に家内はよく耐え抜いてくれた、と心から感謝するばかりです。

しかし、病気だったとはいえ私には家内を思いやる余裕はなく、それどころか「死んでしまいたい」などと身勝手なことを考えていたのです。本当に自分中心の極みだったと思わされました。それまで、自分は被害者だとばかり思っていたのですが、実は家族への加害者であり、わがままで自分勝手な罪人だと気づかされたのです。

わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。（マタイ　9・13）

このみことばの通り、イエス様は私のような罪人を招くために来られたのだと実感できました。そして、これほど自己中心的で盲目であった者の罪を、いのちに代えて贖ってくださった主のご愛と憐れみを、改めてみことばから知ることができ、心から悔い改め、主に感謝しました。すべては、主が導いてくださったことでした。

わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。（ヨハネ　10・11）

わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。――神である主の御告げ。――わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。（エゼキエル　34・15～16）

2主は不思議なことをなさる

復職して六年後の一九九四年、私は銀行を中途退職して大学職員になることになり、本店に挨拶に行くことにしました。かつての上司はすでに銀行をやめて一般の会社に移っていました。しかし驚いたことに家内が、その人のところにも挨拶に行こうと言い出したのです。私は全く気乗りがしませんでしたが、その人を訪ねました。そしてそこで私たち二人は、考えられないような主の不思議を見させられたのです。

久しぶりに対面したその人は、開口一番「あの時は本当にすまなかった。申し訳なく思っています」と頭を下げたのです。いつも部下を誰かれかまわず大声で怒鳴りつけていた人が、目の前で、一言も弁解することなく謝っているのです。自分の目を疑いたくなるような光景でした。

しかし、その後で話を聞いて納得がいきました。その人は「今、肝臓を患っていて教会の人たちに支えられている」と言い、「最近はマタイ受難曲を好んで聞いている」とも言われました。「主がこの人を変えられた。この人は間違いなく救われている」と確信でき、私たちも救われた経緯を証した後、持参した集会の本「光よあれ」を渡して別れを告げました。

この体験を通して主は「不思議なことをなさる方」であり「不可能なことは一つも無い方」であると知らされたのです。イエス様は次のように言っておられます。

わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。（ヨハネ　13・7）

苦しみの中にいた時は、神様がおられるならこのような苦しみが与えられるはずはない、と思っていました。しかし、今、すべてが明らかになりました。それは「あの時、上司を通して苦しみを与えられたのは、間違いなく主イエス様だった。それは、自分勝手で傲（ごう）慢だった私を、白旗を上げて降参するまで徹底的に砕き、悔い改めて主のもとに立ち返らせるためだった」のです。次のみことばに対して心からアーメンと言うことができます。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119・71）

後日、この元上司を集会のメサイア・コンサートに招待しましたが、残念ながら都合がつかず来てもらえませんでした。そしてその何ケ月か後、銀行から送られてきた会報の訃報欄にその人の名前があったのです。肝臓ガンで亡くなられたと後で友人から聞きました。

主イエス様は、私と同様迷える羊であったこの上司をも、限りない愛と憐れみをもって救ってくださり、永遠の住まいである天国に導いてくださったことを確信できました。本当に主のなさる不思議と憐れみに、改めて感謝するばかりでした。

3 主は最善を行われる

これらのことがあった後の十数年間は、私たち家族は特段の試練もなく平安のうちに過ごしました。ただ、たとえ年月は経っても私は苦しみ抜いたあの頃をよく覚えており、うつ病のことはよく知っていると自負しておりました。しかし、ある時うつ病の人と話す私の態度を見ていた家内から「今日のあなたは、昔のことを忘れて健康な人の立場から話をしていた」と指摘されたのです。

あなたは心のうちで、「この私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ。」と言わないように気をつけなさい。（申命記　8・17）

私はいつの間にか自分の力で元気になったかのように錯覚し、高ぶる者になっていたと知り、悔い改めさせられました。これも主が気づかせてくださったと思います。

また、常々私は二人の息子たちだけは私のように苦しまずに救われて欲しいと願っていましたが、主の考えは全く違っていました。大学卒業後に六年間勤めた会社を辞めて転職したばかりの長男が、私と同じ心の病になって戻ってきたのです。前の会社では新入社員向けリクルートページに「先輩社員の一日」として息子が紹介され、家内も私も喜び、すっかり安心していました。たまにしか帰って来なかったとはいえ、私は経験者でありながら息子の病気の兆候に気づかなかったのです。大変悔やまれました。苦しまずに救われて欲しいという何とも浅はかで虫のいい考えを持つ私に、主からガツンと鉄槌（てっつい）を下された思いでした。

家内も私も最初は非常に驚き、がく然とし、うろたえました。信仰がなかったら、この出来事は災難としか思えず、今でも悩み続けていたと思います。しかし本当に主に感謝すべきことに、私たち夫婦は、何もできない無力な状況をそのまま主イエス様に打ち明け、心を一つにして祈ることができ、その都度考えられないほどの平安が与えられたのです。

民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。（詩篇　62・8）

だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。（マルコ　11・24）

主イエス様に祈りすべてを委ねることのできる幸せを、今、身に染みて感じております。多くの集会の兄弟姉妹が、息子のために祈ってくださったことを心から感謝しております。現在、息子はそれまで長い間休んでいた集会にも日曜ごとに導かれています。また、最近は集会の兄弟の会社で週三回、

パートで働かせて貰えるまでに回復してきています。すべては主イエス様の恵みと、兄弟姉妹方のお祈りのお陰です。本当に感謝しております。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。ですから、弱った手と衰えたひざとを、まっすぐにしなさい。

（ヘブル　12・11～12）

この出来事は、生ぬるい信仰に陥っていた私への主からの戒めの声であったと思います。そして勿論この病気は、息子の救いのためにどうしても必要だったことは言うまでもありません。現に彼は「もしも病気にならなければ、僕は間違いなく集会に戻っては来なかった」と言っています。苦しみがなければ人は主のもとに来ようとはしない、という事実を改めて知らされる思いです。

振り返ってみますと、数え切れないほど多くの恵みが、私と家内の両親、息子、兄弟、友人たちに注がれました。心から感謝しております。

あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。（詩篇　56・13）

主よ。まことにあなたはいつくしみ深く、赦しに富み、あなたを呼び求めるすべての者に、恵み豊かであられます。

（詩篇　86・5）

久田博／一九四五年香川県直島生まれ
浦和高校、慶応義塾大学経済学部卒業
富士銀行、国際基督教大学を経て二〇〇六年に同大学を定年退職

わたしが示す地へ行きなさい

和田　宗勝



宗勝さん、ご両親と

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

（詩篇　103・1～2）

1 救われた経緯

私は一九七五年六月二十七日、和田芳明・ヒロ子の長男として生まれました。年子の弟周作がいます。十歳のころから両親に連れられて吉祥寺集会に集い始め、小学校六年のクリスマスに洗礼へと導かれました。しかし私自身が罪人であること、イエス様が自分のために十字架に架かって死んでくださったと知ったのは、高校一年の八月二十四日、軽井沢のバイブルキャンプの時でした。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。
（ローマ　7・15、24～25）

自分の心の中から出てくる思いの汚さにとても苦しんでいた時でした。主イエス・キリストゆえにパウロが心から喜んでいるこのみことばを見つけたのが嬉しく、聖書に日付を記しています。

こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。
（1ペテロ　4・2）

かつて、私自身の心に何かためらいがあったり、迷ったりしている時、聖書のみことばが冷たく、冷酷に感じることがありました。また兄弟方、姉妹方との交わりを通しても同じように感じる時がありました。またどうしてうちの家は「主の命令」のゆえに厳しいのだろう、という思いを持ちながら育ちました。たとえば、子どもの頃の親の姿勢（命令）は次のようなものでした。

1小中学生の時は、テレビゲームは買わない。
2中高校生の時は、日曜礼拝を守れない部活動は認めない。
3高校・大学時代は異性との交際は認めない。まずは学生としての本分を遂げること。
4大学受験浪人は認めない。受験を通して主が示される道を行くこと。
5大学時代に留学するチャンスが与えられても、精神的にも肉体的にも自立していないため、勧められない。

しかし、主が私の目を開いてくださり、主は私を祝福したいと思っておられることを知った時から、みことばはいのちの言葉であることを体験するようになりました。

自分が親になって気づくことは、両親は、私が主を知るチャンスを先延ばしにしない妥協のない態度を取ってくれた、ということです。与えられた命令の真意について悩みながら私自身が直接主に叫び求め、主から答えを体験的にいただくことを切に願ってくれていました。こうして、自分自身が求めた宝物については閉ざされましたが、「主の目に最善な宝物」

を教えてくださいました。

1テレビゲームの代わりに二輪車を買ってもらい、乗れるようになった頃に学校で人気のスポーツとなり、体育の授業で取り入れられたこと。
2高校時代の部活の代わりに毎夏冬、御代田でのセンター建築のお手伝いができ、また夏には毎週キャンプに参加し、大切なものを学びました。
3同世代また先輩の兄弟姉妹との交わり、海外キャンプ・メサイアでの賛美等、多くの恵みをいただきました。
4大学受験を通した挫折により、主の前に降参し、主に道を委ねることを体験的に教えていただきました。また、夜間の大学に進学したからこそ火曜日の集会に毎週参加することができました。
5大学時代には留学することはできませんでしたが、ドイツから来られた若い兄弟姉妹との交流をいただきました。それを通じてドイツ語を学ぶ機会が与えられました。単なる国際交流ではなく同じ信仰を土台とした交わりは留学では学び得ない貴重なものでした。現在に至るまで友人関係を超えた深い兄弟姉妹の交わりをいただけたのは一つの宝物になりました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしが
あなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。（ヨハネ　14・27）

2海外生活と結婚

大学を卒業し、社会人四年目に海外駐在の辞令を受けました。赴任当日、ドイツ到着後の入国審査で五時間拘束されました。ドイツ語を少し勉強したことへのプライドは、またたく間に壊されました。日本とヨーロッパの商慣習の違い、業務の習得、管理される立場から管理する立場への変化など、公私の適応については最初の三年くらい、地に足のつかないような生活を送っていました。それまで何度かドイツへ旅行した経験は役に立ちませんでした。赴任三年目には、当時のドイツの社長だった上司に、「今まで何を学んだのか！」と叱責されました。私は「もう体力・知力とも限界なので日本に帰してください」と絞り出すようにしてお願いしましたが、その上司はしばらく間を置いて、「君には信じる神様がいる

だろう。僕にはいない、その神様に頼ったのか?」と予想外の言葉が返ってきて、はっとさせられました。「自分自身にはイエス様がいる、どうしてそのイエス様をもっと見上げないのか?」と未信者の上司の口を通じて主が語りかけてくださったことを知り、「もう一度主の前にやり直そう」と思わされました。そのようにして主が一歩、一歩ドイツの生活を導いてくださったことは、大きな憐れみでした。

ドイツに赴任して五年ほど経過した頃、結婚について真剣に祈るようになりました。話は戻りますが、二〇〇一年にドイツへ赴任する前、ベック兄弟より「結婚相手として祈っている姉妹がいますか」と尋ねられ、粕谷円佳姉妹の名前を出しました。しかしその時は親の反対もあり、気持ちを伝えることなく旅立ちました。ドイツに赴任してからの最初のクリスマス、円佳姉妹から自分のことを祈ってくれているメールを貰いましたが、それでも親の了解は得られなかったので、自分の気持ちとは裏腹な返事を出しました。当時の両親の姿勢は受け入れがたかったのですが、両親のことばは、「もし私たちが反対しても、御心なら主は必ず結び合わせられる」というものでした。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。主の御告げ。天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

(イザヤ　55・8〜9)

二〇〇六年初め、自分が一人でドイツにいることに平安がなくなり、祈った際に、五年前に両親はなぜ円佳姉妹との結婚をあれほど反対したのだろうか、という思いと共に、もう一度両親と話したいという気持ちが与えられました。誤解のないよう言っておきますと、昔から今まで、親の言うことに従ったことは後悔していません。親に従うことは主の命令です。自分を心から愛し、自分の祝福を祈ってくれるのが親だからこそ従いました。親の祝福のない結婚はできないという確信がありました。でも、覚えている限り、反対の理由は、姉妹の家族はクリスチャンでないこと、またドイツ赴任を控えた中での同時進行の結婚はよくない、ということでした。それで、この件についてもっとよく両親と話し合い、主の御心を再度知った上で、先に進みたいという気持ちが強くなりました。こうして、二〇〇六年夏のミヘルスベルグでの喜びの集いの前に両親と交わる機会が与えられるように祈りました。また円佳姉妹もその集いに参加することを知ったので、このことを主にあって決着をつけることを願いました。

両親と話し合った際、両親から実はそのことについて謝りたいと言われ、びっくりしました。旅の直前に両親はベック兄姉と交わり、円佳姉妹について、また姉妹の信仰についてもはっきりと知ったそうです。そして、間に合うのであれば、円佳姉妹との結婚を共に祈りたい、と伝えてくれました。私自身も円佳姉妹のことを一途に六年間祈っていたとは言えませんでしたし、心の思いとは違う手紙を書いたこともあり、そうしたことを謝った上で結婚の申し込みをする道が開かれるようにと、両親と共に祈りました。

円佳姉妹の到着前に、ミヘルスベルクの宿舎でベック兄姉にもその旨を申し上げ、すべて主に委ねることを三人で共にお祈りする機会をいただきました。こうしてミヘルスベルクで円佳姉妹と静かに話をすることができ、結婚の申し込みを受けていただきました。主が導かれた結婚に平安を覚えた時でした。

日本で結婚式を挙げる一カ月ほど前、ポーランドに会社を設立するための異動の話が出てきました。当時は円佳姉妹とはドイツと日本で祈りあう毎日でしたが、自分にとっても未知であるポーランドに赴任する可能性がある話をしました。姉妹は、「宗勝兄弟の行くところならどこにでも行きます。主の導きを祈って行きましょう」と言ってくれました。しかしそれでも、この異動にはかなり心の葛藤がありました。人の人生を考えず、駒のように人を動かす会社に憤りを覚えました。しかし、ちょうどその頃見た映画「パッション」に、聖書の次の箇所の場面がありました。

そこで、ピラトはイエスに言った。「あなたは私に話さな

いのですか。私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか。」イエスは答えられた。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。」

（ヨハネ　19・10〜11）

この箇所を通じて、イエス様が当時の権威と主のご計画にお従いになられたということに気づかされました。自分の人生とは会社によって勝手に決まるのではなく、会社の辞令も主のご支配なくしては何も起こり得ない、ということについて平安を得ることができ、ポーランドに赴任する決心がつきました。こうして、赴任する決心がついたこと、またその経緯を証しとして上司に話しました。その方は過去に私を叱責してくれた人でしたが、私の話をただ黙って聞いてくださり、良かったねと声をかけてくださいました。すべてをご支配くださった主を恐れます。

3ポーランドでの生活

結婚してから三ヶ月後、ポーランド、ブロツワフへ来ました。ドイツの兄弟姉妹との別れも辛いものでしたが、主のみことばに平安を見出しての出発で、ドイツ赴任の時もそうでしたが、創世記のアブラハムの気分でした。

あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。

（創世記　12・1〜2）

ブロツワフに待っていた仕事はまさに開拓でした。会社からは特に方針も示されず、自分でゼロから始めなければならない状況に愕（がく）然としました。アパート探し、契約、電話線の開通、銀行口座の開設、健康保険への加入、平行して会社登記手続き、会計会社との契約、滞在許可、労働許可、ポーランド免許証の申請、会社設立後の商品開拓、顧客取り

込みのためのセールス、従業員の採用、事務所の開設、設立後の会社のシステムの確立・習得、最後にマニュアル作成等、その期間は約一年に及びました。

見るもの、聞くもの、まったくわからない状況でした。書類もすべてポーランド語で、英語ないしドイツ語の訳を挟んで、生活・仕事になれる作業というのは倍以上の時間がかかりました。苦しかったのは事実です。仕事で行き詰った時、悔し涙を流している私にいつも励ましと慰め、そして祈りをもって支えてくれたのは家内でした。

話は前後しますが、ドイツのある兄弟がブロツワフの兄弟姉妹を紹介してくださったことはまさしく一筋の光でした。ある家族が引越荷物の荷おろしを手伝ってくださったことは最初の恵みでした。このご家族はドイツ人のご主人とスイス人の奥様で、私たちより六年前にポーランドに宣教に来られ、集会で大きな重荷を負っておられます。ポーランド語を上手に話され、この国で生活を始めようとする私たちに親身に接してくださいました。兄弟は、会社の銀行口座開設にも通訳として手伝ってくださいました。かなり大きな銀行でも、英語を話せる従業員がおらず、外国人が通訳なしでは対応できないような状況でしたので、主の恵みに感謝しました。まさにエリシャの体験と同じでした。

「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」と言った。そして、エリシャは祈って主に願った。「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」主がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。

（2列王　6・16〜17）

兄弟姉妹をそこに備えてくださった主に感謝でした。今でも親しく交わりを持たせていただいています。

私たちができることは二人で心を合わせて祈り、主に道を尋ね求めることでした。私たちが結婚した頃、親しい兄弟姉妹が「二人で毎朝祈る時間を持ってください」と言われた言葉が心に響きました。何度か挫けそうになった時、二人で祈

れる恵みを感謝しました。私たちにとって、二人の子どもをポーランドで授かったことは、大きな喜びでした。主は出産を通じて、ご臨在とご愛を見せてくださいました。家内にとっては本当に大きな決断であったと思いますが、夫のいるポーランドで出産をしたい、という思いを家内に与えてくださいました。主に感謝しています。ポーランドの滞在も五年目を迎えました。世界を見れば政治的にも経済的にも混沌とし、主のご再臨の予兆が世に満ち始めています。私たちは主の再臨を待ち望みながら、今置かれている持ち場で主がくださったご愛と宝物を宣べ伝えたいと切に願っています。

私たちの歩みは、家族や多くの兄弟姉妹方の祈りに支えられていることを実感します。感謝とともに、私たち自身は親として、子どもの救いを最優先に祈って行きたいと思います。

神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。セラ
川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。神は夜明け前にこれを助けられる。国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいだ。神が御声を発せられると、地は溶けた。万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。セラ
来て、主のみわざを見よ。主は地に荒廃をもたらされた。主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。セラ　（詩篇　46・1〜11）

和田宗勝／横浜市立瀬ヶ崎小学校、横浜市立六浦中学校、神奈川県立横浜立野高校、神奈川大学法学部卒
西日本鉄道株式会社　国際物流事業部　ポーランド支店勤務

主が成し遂げてくださいます

和田　円佳



円佳さん、ご両親と

1救いについて

私は高校三年の十七歳のクリスマスにイエス様の救いに与（あずか）りました。当時私の心の中は真っ暗闇で、家庭でも、友人の中にいても、私の心の中には絶えず孤独と空しさが満ちていました。両親は共働きで忙しく、私は小学生の頃からいわゆる「鍵っ子」として育ちました。三つ上の兄との仲は悪くはありませんでしたが、それぞれが独立した生活をしていました。ですから自然と両親や兄に対してよりも、友人に心を開くようになり、また色々なことを自分で考え決定するようになっていました。

友人関係はうまくいっていましたが、私は人に自分をわかってもらいたいという思いが強く、人に多くを期待しては裏切られ、がっかりするという繰り返しであったように思います。また私の心の中にはとてもいじわるで自己中心な思いがあって、人を平気で傷つける冷たい心があることに気がついていました。自分が理解されないと友人に腹をたてたり、一人で落ち込んだりしていました。

両親に対しても、働いてくれていることへの感謝はなく、両親は自分のことをわかってくれていない、愛されていない、という思いがありました。生きることの意味もわからず、勉強したり努力をする意味はどこにあるのか、と自問自答しては答えがわからず、もんもんとして、空（むな）しさだけが心に満ちてゆきました。「誰かにこの心の内をわかってもらいたい、解決してもらいたい」と望むのですが、話して理解してもらえなかったら生きていけないようにも思いました。

そんな中、転機が訪れました。高校三年生のクリスマスの時期に、親友の平久美子姉より、「吉祥寺でクリスマス会があるのだけど、知っている人は皆ほかのクリスマス会に行ってしまって、知り合いが誰もいないの。お願いだから一緒に来て」と言われました。私は最初は断りましたが、度重なる誘いにしぶしぶ行くことにしました。

そのクリスマス会の前夜、母が「何か心に思っていることがあるのなら言ってちょうだい」と言いました。しつこく問いただす母を前に、私の中で張りつめていた何かが破れました。そのとき何を話したのかはよく覚えていませんが、色々な心の葛藤や憤りを母にぶつけていました。しかし、それでも母には思いが通じず、やっぱり両親は自分を理解することができない、という思いに打ちのめされ、その晩バスタオルに顔をうずめてわんわん泣きました。そして、泣きながら「もし、本当に神様がいるのなら、助けてくれ！」と、心の中で叫びました。

クリスマス会の日は日曜日でした。私の心は不思議なほど静まり、神様に開かれていました。礼拝があるのなら出てみたい、とも思い、クリスマス会の後の礼拝に出席しました。兄弟姉妹の賛美が胸に迫り、涙があふれてきました。聖餐のパンとぶどう液が回ってきたとき、私は無性に「私もそれがほしい」と思い、聖餐にあずかりました。何も理解していませんでしたが、そのとき救われたのだと思います。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。
（ローマ　10・13）

その後、立ち直った私は数週間、イエス様から心が離れてしまっていました。あるとき私は「絶えず祈れ」の本を読んでいました。そのとき、次の文章に目がとまりました。

「おそらくあなたは、いままで罪人として主のみもとに近づいたことがなかったかもしれません。あなたが必要とするただひとりのおかたは、主イエス様です。ですから主のみもとに近づいてください。主イエス様だけが、あなたを救うことができるただひとりのおかたです。主は決してあなたをこばまないということを信じてください。主はあなたを受け入れてくださり、ゆるしてくださり、永遠の平安をあたえてくださいます。・・・どんな動機からであろうとも、ともかく主に近づきなさい。そのままの状態で主のみもとに来なさい。主はあなたが来ることを望んでおられます。あなたが主のみもとに来るとき、あなたは主が拒まずに受け入れてくださり、ゆるしてくださり、助けてくださり、働いてくださり、強めてくださり、導いてくださることを経験します」

この文章の中の「そのままの状態で主のみもとに来なさい」と「主は決してあなたをこばまない」の二つの言葉が私の心をとらえました。イエス様のところに行こう、という思いがわいてきました。それからは、主がすべてを導いてくださいました。数ヵ月後にベック兄が交わってくださり、悔い改めの祈りと主に愛されている喜びを教えてくださいました。また、兄弟姉妹とともに祈る喜び、交わりの喜びも教えられました。こうして、自分が求めていたものは神様の愛であったこと、それは人間には決して与えることのできないものであることを知りました。家庭の秩序の大切さについてもみことばを通して教えられ、それまで両親をあなどり、敬っていなかったことを悔い改めました。それまで体験したことのない心の平安と神様に愛されている喜びをいただき、私の人生は百八十度転換しました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

（エペソ　2・8）

2結婚について

私は、若者の祈り会やメサイアの賛美を通して和田宗勝兄弟に好意を抱くようになりました。「この人となら結婚してもうまくやっていけるかもしれない」と思うようになり、主に何度も祈りました。またみこころでなければ閉ざしてください、とも祈りました。ですが、高まる感情に苦しくなり、主におゆだねします、と苦しみの中で祈った一週間後に、兄弟のドイツ転勤の話を聞きました。不思議と、このことは主から来ていると確信することができ、結婚も、みこころならば主は必ず導いてくださるに違いないと信じることができました。

二〇〇一年六月、兄弟はドイツへ旅立っていきました。私は、みこころならば主がすぐにでも導きを与えてくださるだろうと思っていましたが、兄弟が転勤して数ヶ月がたち、待っているだけの状況に耐え切れなくなりました。どうしたらよいのか全くわからず、苦しい時が続きました。ある姉妹との交わりの中で、兄弟に思いを伝えてみたらどうか、みこころしかならないよ、とアドバイスをいただき、私は自分の思いを思い切って伝えることにしました。二〇〇一年の十二月のことです。好意を持っていること、そして結婚について祈っていることをメールに書きました。

しかし、なぜかそれから三ヶ月の間返信はありませんでした。私は、兄弟は返信を遅らせるような人ではないと思いましたので、メールが届いていないのではと思い、翌年三月に再度同じ内容のメールを送りました。このときはすぐに返信が来ました。内容は、特別な感情は一切ないし結婚のことを祈る思いもありません、というものでした。それを読んで、ショックではありましたが、「ああ、これでようやく前に進める」とほっとしたのを覚えています。

しかし、一時帰国中の宗勝兄弟を集会の中で見かけることがあり、間接的に兄弟のメッセージやお祈りを耳にするたびに、愛情と尊敬の思いに満たされ、どうしても兄弟に対する思いを手放すことができませんでした。同時に心の中で、兄弟との結婚がみこころでないのならば、なぜ主は私にこのようなつらい試練を与えられるのだろう、と不平不満の思いでいっぱいになっていきました。主を愛し、信頼するという態度から全くかけ離れた、信仰のない自分自身の姿を見せられました。みことばも力のないものになってしまい、喜びもなくなりました。それでもかろうじて集会に集い続けることができたことは、主のあわれみと兄弟姉妹の祈りのおかげであったと思います。

そんな中、二〇〇五年の夏、ひとつのみことばが与えられました。

先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。あなたがたは、それを知らないのか。確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける。

（イザヤ　43・18〜19）

これは宗勝兄弟のことを言われているのだと思いました。そして、結婚のことはもう抜きにして、イエス様をもっと知りたい、もっと喜びたいと思うようになっていきました。主にあっては、今の独身の時もかけがえのない時であり、主をよりよく知ることのできる恵みの時として、受け取ることができるようになりました。宗勝兄弟にも、ふさわしい助け手が与えられますようにと祈ることができるようになりました。

そして、二〇〇六年の六月、主をもっと喜びたいという思いと、「みこころだけがなりますように」という祈りだけで参加をしたドイツキャンプで、宗勝兄弟より結婚の申し込みをいただきました。過去、気持ちを偽って私に返信したことを謝ってくれ、結婚の申し込みに至った経緯を聞かせてくれました。大変驚き、また主を恐れました。主がすべてを動かしておられることを確信することができ、主のご真実にただ

感謝の思いで、結婚の申し込みをお受けいたしました。

翌年二〇〇七年五月三日、御代田の福音センターにて結婚式をあげさせていただきました。

3ポーランドで与えられた三つの恵み

ポーランドでの一番大きな恵みは、主にある兄弟姉妹が与えられていることです。主は兄弟姉妹を通して本当に多くの助けを与えてくださっています。特に二人の子どもの出産に際しては両親学級での通訳や上の子の世話、産後の食事の世話など、そのつど主の恵みの豊かさを体験させていただきました。兄弟姉妹の助けがなかったなら、二人の子ども、長女の愛佳と長男の喜勝を異国の地で産むことはできなかったと思います。異国の地にあっても同じ御霊で主を賛美し、礼拝できることは、言葉の壁を越えた大きな祝福です。

二番目の恵みは、夫婦の絆が深まったことです。ドイツでの三ヶ月間の生活は、すべてが整えられていました。しかし、ポーランドに来てからは、新しい言語、新しい住まい、新しい人間関係、新しい集会・・・とすべてがゼロからのスタートであったことは、今思うと私たちにとって大きな祝福でした。

二人の子どもの出産にあたっても、妊娠中から出産、産後にいたるまで、共に助け合うことができたことはお互いにとって大きな祝福でした。

言語の壁にぶつかって涙することも幾度となくありました。私にとっては英語もポーランド語と同じくらい難しく、集会にいても「もっと深い交わりがしたい」と思うこともしばしばでした。最近はメッセージの半分くらいを理解できるようになり、日常会話はほぼ問題ない程度まで話ができるようになりました。ここまで勉強を続けられたのは主人の励ましがあったからです。

三番目の恵みは、二人の子どもを通して主のご臨在を体験させていただけたことです。ポーランドでは娘の愛佳と二人だけで過ごす時間が長いこともあり、私たちはおととしの春

頃より愛佳の幼稚園のことについて主に祈り始めました。初めは日本人のお子さんたちが通っていらっしゃるインターナショナルスクールを考えましたが、費用がかかることがわかりました。しかし愛佳の将来を考えると、英語で教育してくれるところがふさわしい、と考えて祈り続けました。

二〇一〇年十一月に車のワイパーに幼稚園のチラシがはさまっていました。そこは一ヶ月前にオープンした、英語で教えてくれる幼稚園で、歩いて五分のところにありました。先生は日本で働いていた経験もある方だということもわかり、一月から娘は幼稚園に通い始めました。娘はそこが気に入り喜んで通っていることも、大きな主からの恵みです。

また、長男・喜勝の出産に際しても、どこの病院が良いかと夫婦で祈っていました。初めは愛佳を産んだ病院でと思っていましたが、結局は予定日より約一ヶ月早い出産となり、うちから一番近い病院で出産することになりました。そこは快適な病院で、産婦人科はその年に新設されたということが後からわかりました。しかも、その病院にはポーランド集会の姉妹が働いていたのです。入院生活は八日間にも渡り、私にとっては長く感じられ、悲しい思いをすることもありましたが、ほぼ毎日この姉妹が顔を出してくださり、力づけてくださったことは本当に感謝でした。

このように、主は私たち家族のために、新しい幼稚園、新しい病院を建ててくださいました。これは主の備えであり、祈りの答えであったと信じています。

出産した六月二十四日の朝、日々の光を通していただいたみことばを紹介します。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。（箴言　3・6）

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

（1ペテロ　5・7）

主は、いつも共にいてくださって、私たち家族を背負ってくださっていたのだ、とわかります。たとえ言葉が通じなくても、主にある兄弟姉妹の群れの中にとどまることがいかに大切か、いかに多くの守りと祝福を与えてくださるか、を体験させていただきました。ポーランドでの生活はいろいろな意味で忍耐の連続であり、孤独との戦いでもあります。しかし、主ご自身が孤独に打ち勝たれたお方であり、近い将来私たちを迎えに来てくださる再臨の希望をいただいていることは大きな慰めです。

もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。

（ヘブル　10・37）

昨年私は出産に備えて、長くしていた髪を短くしました。出産を終えて五ヶ月たった十一月、少しのびてきた髪を整えてもらうために美容院の予約をしましたが、心の中にはある迷いがありました。それは、髪を長くのばすか、短い髪にとどめるか、ということでした。

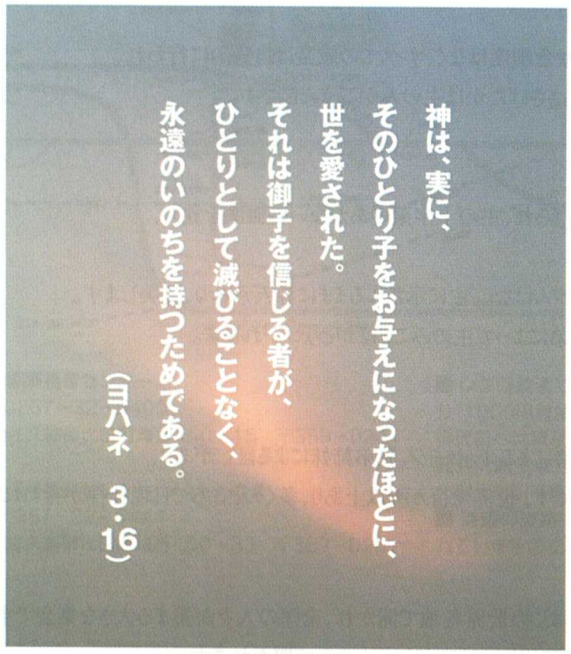
聖書の中に「長い髪は女の光栄である」とあることも知ってはいましたが、それにこだわる必要はない、それにこだわることは律法的なのではないか、と思っていました。ですが、なぜか心に平安がありません。主人以外の周りの方は皆、私の短い髪型をとてもよく似合うといってほめてくださいましたが、主人は「長くした方が素敵だよ」と言ってくれていました。私の心の中に葛藤が生じました。そして、その晩私は主にこのようにお祈りしました。

「イエス様、美容院の予約をしました。私は短く切りたいと思うのですが、平安がありません。長い髪が光栄であることは知っていますが、…周りの人の声も気になってしまいます。長くすることが主のみこころでしたら、確信を与えてください。いやいやではなく、喜びをもって髪をのばすことができるようにさせてください」

主は、すぐに答えてくださいました。翌朝インターネットを開くと、ベック兄のメッセージがアップされていました。タイトルは「主にある姉妹の証し」でした。私はなぜか今これを聞かなければならないと思いました。すると、引用聖句は第1コリント11章の髪型とかぶりものに関する箇所でした。ポーランドでの祈りに主が吉祥寺で答えてくださったのです。大きな驚きと喜びが心の中にこみあげてきました。主への感謝が心にあふれました。

メッセージを聞き進むにつれ、私自身の心が洗われていくように感じました。マリヤがイエス様の足を髪の毛でぬぐったこと、マリヤにとっての光栄は長い髪の毛だけであったことを聞き、私もマリヤのようになりたいという思いが与えられました。兄弟も、主のしてくださったみわざを共に喜んでくれました。主に感謝しています。

和田　円佳／国分寺市立第五小学校、国分寺市立第一中学校、国立音楽大学付属音楽高等学校、国立音楽大学音楽教育学科卒
夫：宗勝　長女：愛佳　長男：喜勝



キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）



日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

集会の出版物

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない(上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ(上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4−9−11　吉祥寺キリスト集会



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録(第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

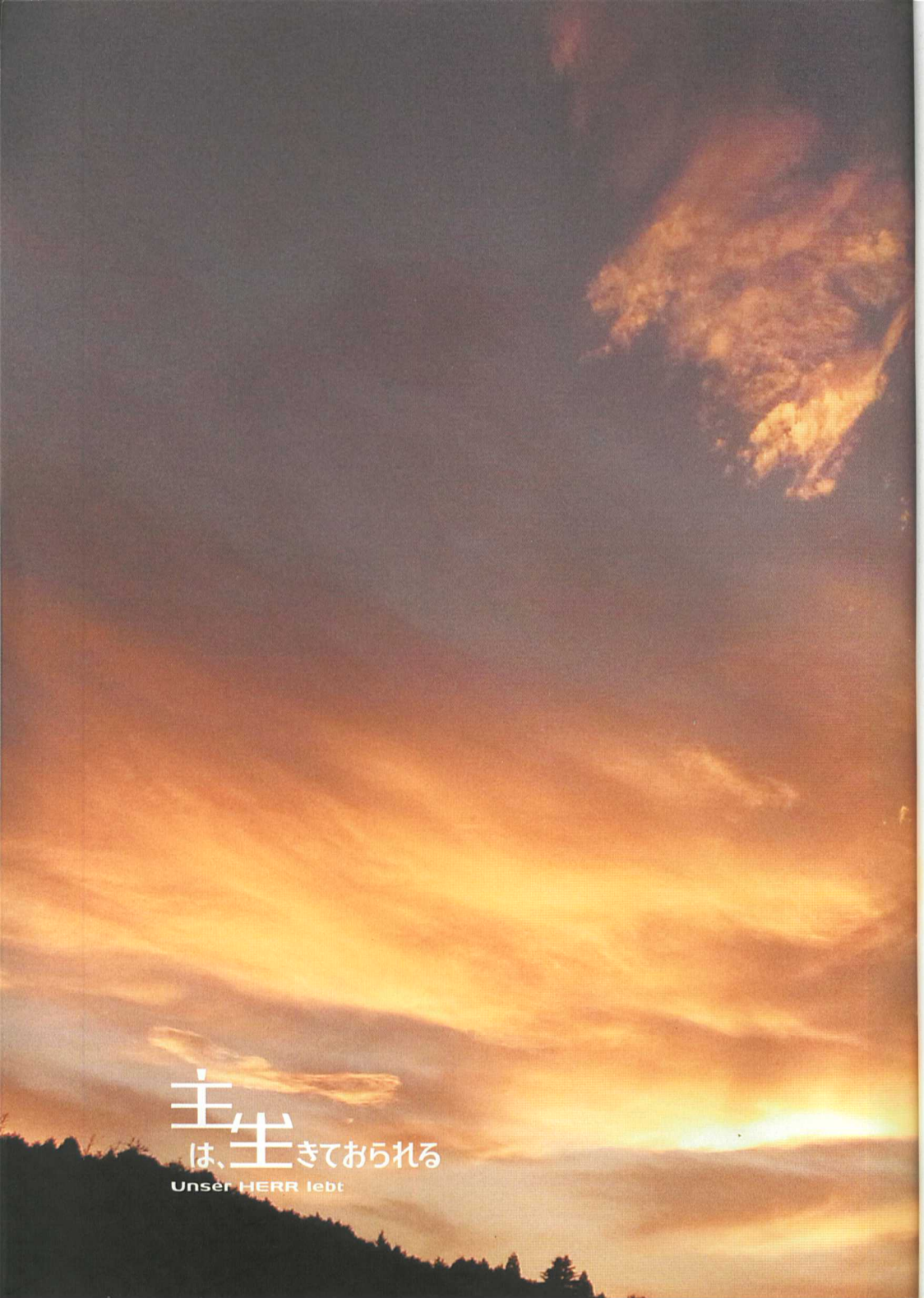
ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ ―私たちは主のもの証しシリーズ(第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を送料のみで配付しています。
お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第26号

2012年10月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

